

修士論文（要旨）

2020年7月

幼老複合施設における世代間交流を継続させる要因
—施設運営の観点から—

指導 長田 久雄 教授

老年学研究科

老年学専攻

216J6903

鈴木 歩

Master's Thesis (Abstract)
July 2020

Factors for Continuing Intergenerational Exchange in a Facility for the Aged
: From a Facility Management Perspective

Ayumi Suzumura
216J6903
Master's Program in Gerontology
Graduate School of Gerontology
J.F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Hisao Osad

目次

序章	2
第1章 共生型ケアとは何か	2
1.1 共生型ケアとは何か	2
1.2 共生型ケアの経緯	2
1.3 厚生労働省の取組み	3
1.4 文部科学省の取組み	3
1.5 世代間交流の意義	4
第2章 先行研究と問題意識	4
2.1 先行研究	4
2.2 問題意識	6
第3章 研究の目的と意義	7
3.1 研究の目的	7
3.2 研究の意義	7
第4章 研究の方法	7
4.1 調査対象	7
4.2 調査方法	7
4.3 倫理的配慮	8
第5章 分析	8
5.1 分析の方法	8
5.2 分析の手順	8
第6章 結果	9
6.1 結果と結果図	9
6.2 ストーリーライン	10
第7章 考察と今後の課題	12
7.1 考察	12
7.2 今後の課題	18
謝辞	
引用文献	
資料	
① 表 1-1 調査対象：施設の基本属性，表 1-2 調査対象：対象者の基本属性	
② 表 2 分析ワークシートの作成例	
③ 表 3 32 の概念と 6 のカテゴリ	
④ 図 1 結果図	
付録	
① インタビュー逐語録 (A)	
② インタビュー逐語録 (B)	
③ インタビュー逐語録 (C)	
④ インタビュー逐語録 (D)	
⑤ インタビュー逐語録 (E)	

序 章

研究の背景について

近年我が国の少子高齢化や核家族の進展による家族形態の変化、ライフスタイルの変化による社会状況の変動は、家族間及び地域内のつながりを希薄化し、孤独死¹⁾や引きこもり²⁾に見られる孤独化や孤立化を生み出す要因となっている。

また、高齢者における要支援、要介護の認定者数³⁾は、668万6000人。特別養護老人ホーム1施設当たりの平均待機者数⁴⁾は、100.8人で介護施設の増設が必要となっている。

一方、子どもは少子化及び核家族化の影響で、兄弟姉妹や祖父母とのつながりが希薄となり、社会性を学ぶ機会の減少から、いじめや非行などの問題に結びついている。

また、母親の社会進出増加や核家族の影響は、育児不安を増大させ、虐待等の問題も起きている。保育所利用の待機児童数⁵⁾は、1万6,772人。保育所の増設・整備等が必要となっている。

第1章 共生型ケアとは何か

平野⁶⁾は「共生型ケアとは、地域のなかで当たり前暮らしのための小規模な居場所を提供し、利用の求めに対しては高齢者、子ども、障害者という対象上の制約を与えることなく、その場で展開される多様な人間関係を共に生きる新たなコミュニティとして形づくる営みである」と述べている。

共生型ケアを行うことができる共生型福祉施設には、こども関連の福祉施設と高齢者の介護関連の施設が合築・併設された幼老複合施設も含まれる。多くは、地域コミュニティ活動の拠点となっている。

第2章 先行研究と問題意識

幼老複合施設（高齢者施設と子ども用施設が合築・併設）は増加傾向にはあるが、組み合わせが様々で正確な施設数は把握できていない。

先行研究では、幼老複合施設における世代間交流の実態や交流による効果についての研究はなされ、メリットもデメリットも明らかになっている。しかし、施設運営の観点からの世代間交流を継続させる要因については、いまだ解明は進んでいない。そこで、要因を明らかにすることにより、継続している施設は、デメリットをどう改善したか、また、幼老複合施設の必然性の検証、及び施設の新設や施設が抱えている課題について、糸口を探りたい。

第3章 研究の目的と意義

本研究の目的は、幼老複合施設における世代間交流を継続的に進めていくにはどう運営すべきか、施設の理念や世代間交流のプロセスを探り、施設運営の観点から、施設における世代間交流を継続させる要因を明らかにすることである。

幼老複合施設における世代間交流を継続させるための要因について、施設運営の観点からの解明はいまだ進んでいないことから、本研究は老年学の重要な課題である世代間交流を促進するための研究分野において、複合施設というハード面からのアプローチの重要性を提言できると考えられる。

第4章 研究の方法

調査対象は、東京都内及び神奈川県内の開設から10年以上の合築及び併設の幼老複合施設（資料①表1-1）の管理者（資料①表1-2）。対象者は法人の役員等で、法人の運営にも精通している。又、高齢者施設と子ども施設が併設の場合は、高齢者施設の管理者とした。

8名の調査対象該当者に対し、調査依頼文を送付し、承諾の得られた5名にインタビューガイドに基づき、1名あたり60分程度の半構造化面接を実施した。

調査は2019年12月～2020年4月に行った。なお、新型コロナウイルス感染拡大防止により、5つ目の調査対象者に対しては、電話によるインタビューとなった。

なお、調査は桜美林大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号は19044）。

第5章 分析

インタビューの内容は、逐語録としてデータ化し、質的研究法により、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach）：M-GTAを用いて分析を行った。本研究では、分析テーマを「施設運営の観点による幼老複合施設での世代間交流の継続要因」とし、また、インタビューの対象者A～E・5名を分析焦点者とした。Eについては、電話によるインタビューとなった。そこで、Eは対面式のインタビュー4名とは別途に分析し、大きな違いがあるか、確認した結果、大きな違いがなかったため、4名と共に分析することとした。

分析テーマと分析焦点者に照らして、データの関連個所に注目し、説明概念（データから解釈した結果）を生成する。この概念を創る際に分析ワークシート（資料②表2）を作成する。

第6章 結果

M-GTAの手順で分析を行った結果、本分析では32の概念と6のカテゴリーを生成した。概念とカテゴリーの関係を（資料③表3）に示す。

概念やカテゴリーの相互の関係性を示す結果図を作成した。作成した結果図を（資料④図1）に示す。

M-GTAでは、分析結果を確認するために、概念とカテゴリーだけで文章化したストーリーラインを記述する。本研究におけるストーリーラインは以下のとおりである。

なお、カテゴリーは【 】、概念を<>で示す。

◎【理念の実現に関わる要因】（概念4つ）

幼老複合施設での世代間交流を継続的に進めていくには、<高齢者、子ども、障害者の相互扶助>の関係性を発揮し、<利用者の幸せの追求>を職員が続けることで個人の個性を尊重し、心のこもった質の高い<最良のケアと保育の提供>ができ、一つ屋根の下に暮らす大家族のような<地域の一部としての施設>になればという理念を日々実現していくことが大切である。

◎【法人としての組織に関わる要因】（概念8つ）

施設を継続的に運営していくための<運営の財源>、<有資格者による職員体制>、<適切な職員の人員配置>、<子育て中の雇用形態の配慮>、<職員への教育>、<外国人職員の採用>などが示唆された。また、園児の時に世代間交流を体験した<卒園生

の就労>は幼老複合施設の大きなメリットとなっている。感染症など法人が<抱えている課題の乗り越え>についても速やかな交流の中止など対応ができています。

◎【職員側の環境に関わる要因】(概念 6つ)

介護職と保育職の<職員間の協働・連携>は、高齢者と子どもの交流を継続させるために必要である。施設内に保育所があることで、子育て中の職員は<働きやすい環境>の中で、自然と<笑顔が生まれる環境>となる。行動がゆっくりとした高齢者に合わせる<異なるペースへの共通理解>により、職員は焦ることなく心に余裕ができ、<やりがい>を実感しながら、<寄り添う心>でケアができる。

◎【機会提供に関わる要因】(概念 4つ)

交流の仕方には、<自然な交わり>と<行事による交わり>があり、交流を促進させるためには、交流の機会を増やすことだが、あえて交流の機会を作らなくても<同じ空間の共有>だけで、家庭にいるような普通の日常の在り方もある。いつでも誰でもが立ち寄れる<心のよりどころとなる寄り合い所>の存在は大きいと言える。

◎【利用者側の効果に関わる要因】(概念 4つ)

利用者にとって、住み慣れた地域で<心を寄せ合える居心地の良さ>を実感できる温かな雰囲気施設の施設が必要である。そこで、高齢者は自分は大切にされているという自己肯定感を持ち、子どもも高齢者から優しさを感じ、<高齢者と子どもの相乗効果による自己肯定感の育成>はなされていく。個人への<主体性の尊重>を重視することで、寄り添う介護や保育は確立される。<子どもが苦手な高齢者への対応>は、少しずつ、触れ合いを促してはいくが、決して無理をしないことが施設の鉄則となっている。

◎【地域コミュニティへの参加に関わる要因】(概念 6つ)

施設に対して<地域の受け入れ・協力>があるからこそ、施設は存続できるのだと考えられ、<ボランティアの支え>も大きな力となっている。子ども達に高齢者疑似体験などの体験を通して、<高齢者理解への教育>を施設が担っている。更に<障害者の社会での役割づくり(こども見守り隊)>として、障害者に有用感を持てるようにしている。また、地域の一部として、カラオケの場の提供や研修の場の提供、災害時の受け入れなど<施設の開放>を行っている。年一回の<バザーの実施>は、たいへん大きなイベントとなり、施設を知ってもらうアピールになっている。

第7章 考察と今後の課題

幼老複合施設での世代間交流を継続させる6つの要因の中で、明らかになった主な事項として、理念については、施設の規模や運営の形態に関わらず、施設の理念が机上の空論ではなく、日々、実現されていることが大切である。理念を実現させるためには、法人の組織力が必要であり、職員の職場環境の整備が大切である。調査対象施設では、体制がしっかり整い、働きやすい環境となっていることが分かった。

高齢者と子どもの交流には、何でも話せる職員間の信頼に基づいた協働・連携が必須である。職員が高齢者と子どもの主体性を尊重し、常に寄り添う心で接すれば、介護と保育は確立されると考える。

幼老複合施設が継続できるためには、地域の受け入れ・協力が必須で、地域との関わりが重要となっていることも調査から明らかになった。ひとつ屋根の下で高齢者、子ども、

障害者、職員が寄り添ってお互いを支え合い、地域コミュニティの拠点となり、共生社会を地域と共に作っていると言えるだろう。

先行研究におけるデメリットの改善点として、職員の負担の増加については、職員の協働・連携による協力体制や交流の回数を増やさず、自然な交わりの重視、行動のゆっくりした高齢者にペースを合わせることで、職員が心の余裕を持てるように工夫。子どもが嫌いな高齢者のストレスについては、無理な触れ合いをさせないことを施設の鉄則としている。また、感染症のリスクについては、速やかな交流の中止、介護職と保育職の頻繁な情報交換がなされている。子どもが走り回ることによる高齢者の転倒などの事故リスクについては、どの施設も介護職員数が基準よりも多く、高齢者の状況把握が可能で、適切な人員配置がなされている。他に、子どもが高齢者の衰えた姿を見て、困惑した場合には、職員が子どもに事実を優しく話すことで、理解してもらっていることがデータから明らかになった。

本研究の結果から今後の役割・期待できることとして、幼老複合施設の新設時や新設から間もない施設、また、困難に直面している施設への助言、及びサポート等に本研究で明らかになった6つの要因が活かされると考えられる。

職員の子どもの施設内保育所への入園や職員の家族の高齢者施設への入所により、待機児童の減少や介護士・保育士等の離職率の低下となり、社会貢献におおいに繋がると考えられる。

世代間交流を体験した卒園生による同施設への就労は、理念の継承と職員の人材確保にたいへん役に立つと考えられる。

世代間交流は、子どもの心の豊かさを育て、いじめや非行の減少など学校教育にも役立つと考えられる。

本研究で明らかになった施設の継続に関わる理念の実現、子どもへの寄り添い、職場環境の整備、地域コミュニティへの参加などは、自分の職場での学校経営にも活かされ、助言やサポートができると考えられる。

本研究では、調査の対象を10年以上継続している幼老複合施設とし、都内と神奈川県に限定したが、今後の課題として、対象地域を広げ、更に、新設の幼老複合施設や敷地外にある系列の施設も含め、検討することが求められる。

また、幼老複合施設の高齢者と一般の高齢者施設の高齢者との要介護度や自立度を比較し、高齢者と子どもの相乗効果が、要介護度の改善や認知症の予防改善に影響を与えるか、今後の検討課題である。

加えて、今回の新型コロナウイルス感染拡大に伴い、高齢者と子どもの交流が、リモートでも可能かどうか、今後の検討課題であると考えられる。

謝 辞

本研究を実施するにあたり、質的調査を快く受け入れご協力くださいました施設の管理者の皆様、心より感謝申し上げます。また、研究にあたりご指導いただきました長田久雄教授をはじめ諸先生方に深く感謝申し上げます。そして、アドバイスをいただきました先輩の院生、励ましてくださった友人、およびご協力とご理解をいただきました職場の皆様、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 総務省統計局人口推計 2019年10月1日時点
- 2) 総務省平成30年度版「情報通信白書」単独世帯の増加
- 3) 内閣府平成30年度高齢社会白書 東京都福祉保健局東京都監察医務院「東京都23区内における一人暮らしの者の死亡者数の推移」
- 4) 平成29年度ひきこもりの長期高年齢化、実態調査結果（厚生労働省社会福祉推進事業）
- 5) 厚生労働省「介護保険事業状況報告月報・令和2年3月末現在」
- 6) 独立行政法人福祉医療機構「平成31年度特別養護老人ホームの入所状況に関する調査」
- 7) 厚生労働省「平成31年4月時点の保育所等の待機児童数の状況について」
- 8) 平野隆之編『共生ケアの営みと支援—富山型「このゆびと一まれ」調査から』2005年
- 9) 「全国の共生型施設の設置状況」 H27年7月末集計
- 10) 厚生労働省「宅幼老所の取組」2013年（平成25年）1月
- 11) 厚生労働省「誰もが支え合う地域の構築に向けた福祉サービスの実現—新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン」2015年（平成27年）9月
- 12) 厚生労働省「地域共生社会の実現に向けて」2017年（平成29年）2月
- 13) 文部科学省「学校施設の複合化の在り方」2009年6月
- 14) 野村千文「高齢者の生きがい」の概念分析『日本看護科学会誌』25(3) 61-66 2005年
- 15) 外山義『自宅でない在宅—高齢者の生活空間論』医学書院 23-37 2003年
- 16) Newman, S. History and Evolution of Intergenerational Programs. 1997
- 17) 草野篤子『現代のエスプリ』至文社 2004年
- 18) 金森由華「高齢者と子どもの世代間交流—交流内容を中心に—」愛知淑徳大学論集、福祉貢献学部篇 2012年
- 19) 林谷啓美、本庄美香「高齢者と子どもの日常交流に関する現状とあり方」『園田学園女子大学論文集』第46号 2012年
- 20) 關戸啓子「高齢者とのふれあいに幼稚園・保育所が抱く幼児の将来への期待—全国の幼稚園・保育所へのアンケート調査結果より—」『川崎福祉学会誌』13(1) 2003年
- 21) 土永典明「世代間交流に関する調査研究—高齢者福祉関係施設を併設している保育所の側面から—」『九州保健福祉大学研究紀要』6、2005年
- 22) 關戸啓子「全国の幼稚園・保育所における幼児と高齢者のふれあいに関する実態調査」『川崎医療福祉学会誌』Vol. 15 No.2 2006年
- 23) 糸井和佳、亀井智子「地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果—文献レビュー—」『日本地域看護学会誌』Vol. 15 No.1 2012年
- 24) 立松麻衣子「高齢者の役割作りとインタージェネレーションケアを行うための施設側の方策—高齢者と地域の相互関係の構築に関する研究—」『日本家政学会誌』59 2008年
- 25) 北村安樹子「幼老複合施設における異世代交流の取り組み」『Life Design Report』第一生命経済研究所 8月号 2003年
- 26) 田中文佳「幼老交流の動向と今後の展望について—特別養護老人ホームにおける子どもクラブの事例から—」『東筑紫短期大学研究紀要』49、2018年

- 27) 吉津晶子・溝邊和成「アメリカ合衆国ハワイ州 Seagull School (Kapolei 校) の世代間交流の特質」『日本世代間交流学会誌』Vol.1 N0.1 2011 年
- 28) 糸井和佳・亀井智子ほか「米国クリーブランド The Intergenerational School における世代間交流活動の実際と特徴」『聖路加看護大学紀要』No.38 2012 年
- 29) 村上寿来「ドイツにおける世代内および世代間交流に関する一考察」『名古屋学院大学論集』社会科学篇 第53巻 第2号 2016 年
- 30) 草野篤子ほか「英国における世代間交流の実際」草野篤子ほか編著『人を結び、未来を拓く世代間交流』三学出版 2015 年
- 31) 草野篤子・石橋ふさ子「高齢者の学校における世代間交流—ノルウェーの場合—」『白梅学園大学研究年報』16 2011 年
- 32) グレイザー, B. G., ストラウス, A. L. (後藤隆訳)「データ対話型理論の発見」新曜社 1996 年
- 33) グレイザー, B. G., ストラウス, A. L. (木下康仁訳)「死の Awareness 理論と看護—死の認識と終末期ケア」医学書院 1988 年
- 34) 木下康仁「グラウンデッド・セオリー・アプローチの実際—質的研究への誘い」弘文堂 2003 年
- 35) 西條剛史「質的研究論文執筆の一般技法」『質的心理学研究』第4号 2005 年
- 36) 木下康仁「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法」『富山大学看護学会誌』第6巻2号 2007 年
- 37) 木下康仁「ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて」弘文堂 2007 年
- 38) 木下康弘「質的研究と記述の厚み M-GTA・事例・エスノグラフィー」弘文堂 2009 年

資料①

表 1-1 <調査対象：施設の基本属性>

	運営の形態	法人の設立年月日	建物の構造	利用定員数	職員数
A	NPO 法人	2006 年 6 月 20 日	合築	デイホーム 12 名 保育園（認可） 12 名 保育園（認可外） 8 名	常勤 4 名 非常勤 18 名
B	社会福祉法人	1962 年 10 月 27 日	合築	養護老人ホーム 50 名 特別養護老人ホーム 50 名 短期入所 13 名 認知症対応型通所 36 名 一般デイサービス 40 名 保育園（認可） 138 名 保育園（事業所内） 19 名	常勤 100 名 非常勤 150 名
C	社会福祉法人	1997 年 1 月 14 日	併設	ケアハウス 29 名 デイサービス 40 名 保育園（認可） 90 名 学童保育室 40 名	常勤 100 名 非常勤 150 名
D	社会福祉法人	1999 年 5 月 日	合築	デイサービス 40 名 保育園（認可） 120 名	常勤 31 名 非常勤 23 名
E	社会福祉法人	1955 年 12 月 28 日	併設	養護老人ホーム 50 名 特別養護老人ホーム 100 名 短期入所 10 名 保育園（認可） 60 名	常勤 164 名 非常勤 84 名

表 1-2 <調査対象：対象者の基本属性>

対象者	性別	年齢	役職名	現職在職期間	調査実施日
A	男性	50 代	デイホーム管理者	13 年	2019 年 12 月 25 日
B	女性	70 代	経営企画本部長	33 年	2020 年 1 月 21 日
C	女性	50 代	ケアハウス・デイサービス施設長	7 年	2020 年 2 月 1 日
D	男性	40 代	デイサービスセンター管理者	16 年	2020 年 3 月 26 日
E	男性	60 代	施設統括管理者	7 年	2020 年 4 月 1 日

資料②

表2 <分析ワークシートの作成例>

概念名	職員間の協働・連携
定義	委員会で意見や情報を交換することで、職員間に共通認識が生まれる。
ヴァリエーション	<ul style="list-style-type: none"> • 職員間の連動とか、協働とかというのは、やっぱりさっき言ったように、みんなが一つのことをうわっとやるんじゃないくて、ここは私がやるからとか、自然と協働がなされてるように思われます。(A: 160) • それともう一つは介護職と保育職が、一緒に一つの行事を作り上げるというところでは、協働しないとどうしてもできませんので、情報共有を密にし、そしてその結果どうだったということを、必ず残すというのが大切かなというふうに思っています。(B: 52) • そのためにも、プラスαでセクショナリズムを廃止して、横割りのスタッフが「ふれあい促進委員会」をつくっています。(B: 53) • 例えば、看護師、介護士、保育士、事務職、それからケアマネジャー、ドライバーの果てまでですね。(B: 54) • そういう人たちが「ふれあい促進委員会」をつくり、そしてどのようにしていくか、どういうプログラムをつくっていくかということを、毎月一回、委員会を開いています。(B: 56) • 行事を通してつながっているの、そういうときに介護の職員のの人たちと、保育士の人たちは、職員同士のつながりはありますよね。打合せで。(C: 73) • まずは保育士の主任とデイサービスのほうの責任者とで、年度初めには必ず、いつから自然に交流をするときを始めるか。(D: 20) • 高齢者はずっと同じ場所で卒園というものがございませんので、子どもたちは入園から卒園までというかたちで環境の変化がございますので、新しく進級した子たちが自然にまたお年寄りの場所に安全に来られるように、いつの時期にまた自然にデイサービス内に来ることを始めるかということですか。(D: 21) • 感染症の時期になりましたら、こういったことで気を付けていますのでということで、やりとりを必ず主任と、または園長とで話をするように機会を設けております。(D: 24) • 今はケアハウスのほうと保育園のほうとで、地域交流委員会というのがあって、そちらで職員同士の意見交換とか、情報交換をしながら、年間の交流の計画をつくって、協働しているということです。(E: 28)
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> • 日々の職員同士の信頼関係の中で、自然と協働・連携がなされていることは、すごいこと。⇒職員間で互いの現状を把握していれば、情報交換や意見交換の場は必要ではないということか？ • 「ふれあい促進委員会」は、保育・介護の専門職だけではなく、事務職やドライバーなど職種を越えてスタッフ全員が情報を共有しているので、交流の意義や目的を理解して、促進させることになっている。交流の結果の振り返りをするのは、大切なこと。

資料③

表3 <32の概念と6のカテゴリー>

[カテゴリー]	< 概念 >
〔理念の実現に関わる要因〕	<高齢者、子ども、障害者の相互扶助> <利用者の幸せの追求> <最良のケアと保育の提供> <地域の一部としての施設>
〔法人としての組織に関わる要因〕	<運営の財源> <有資格者による職員体制> <適切な職員の人員配置> <子育て中の雇用形態の配慮> <職員への教育> <卒園生の就労> <外国人職員の採用> <抱えている課題の乗り越え>
〔職員側の環境に関わる要因〕	<職員間の協働・連携> <働きやすい環境> <笑顔が生まれる環境> <やりがい> <異なるペースへの共通理解> <寄り添う心>
〔機会提供に関わる要因〕	<自然な交わり> <行事による交わり> <同じ空間の共有> <心のよりどころとなる寄り合い所>
〔利用者側の効果に関わる要因〕	<心を寄せ合える居心地の良さ> <高齢者と子供の相乗効果による自己肯定感の育成> <主体性の尊重> <子どもが苦手な高齢者への対応>
〔地域コミュニティへの参加に関わる要因〕	<地域の受け入れ・協力> <ボランティアの支え> <高齢者理解への教育> <ul style="list-style-type: none"> ● 高齢者擬似体験（小学生） ● ボランティア体験（中学生） ● 認知症サポーターの育成（小学生～大人） ● 住民参加による認知症高齢者の搜索訓練 ● 町体験（小学生） ● 職場体験（中学生） <障害者の社会での役割づくり（子ども見守り隊）> <施設の解放> <バザーの実施>

資料④

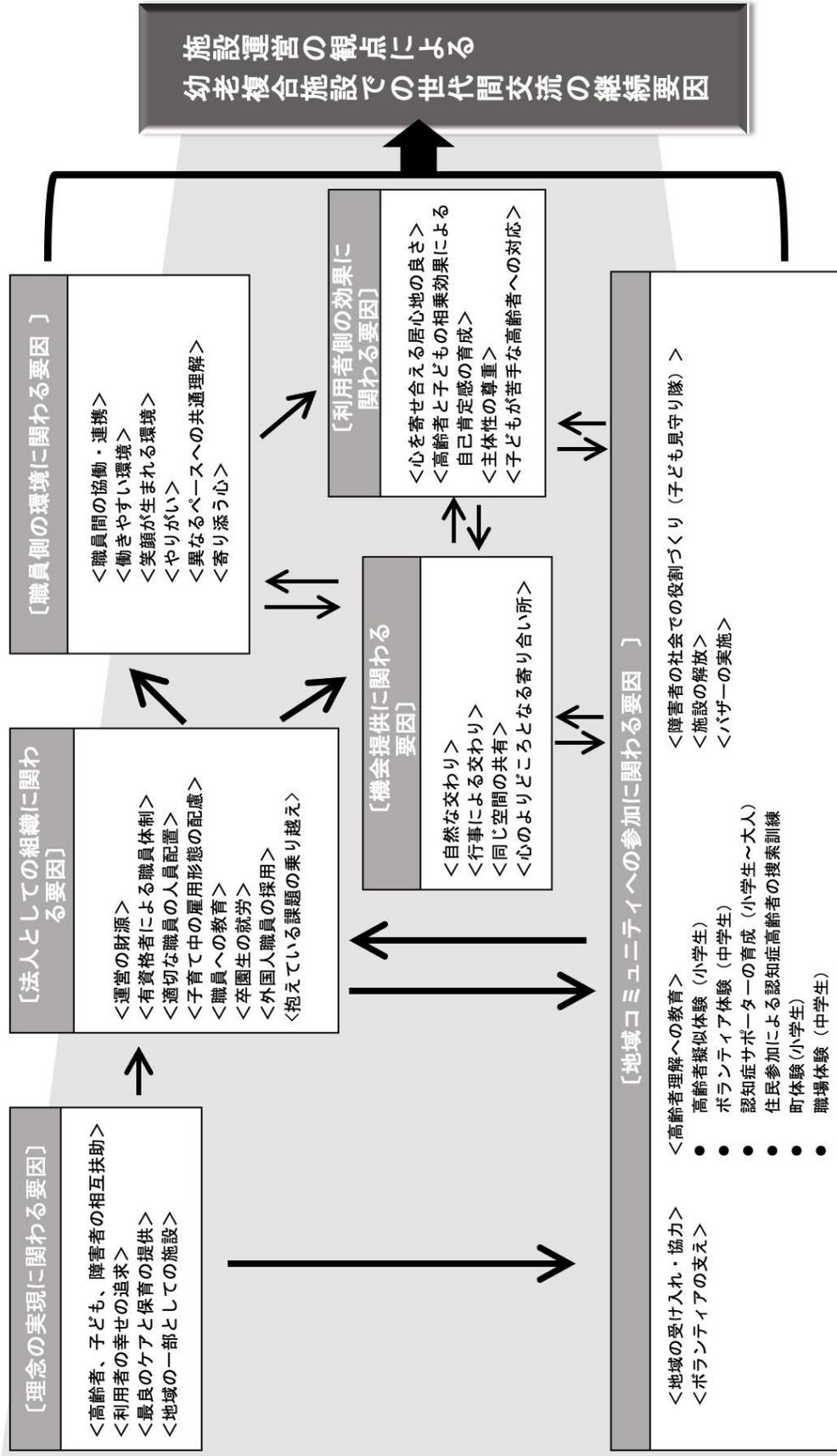


図1 結果図

付録

① インタビュー逐語録 (A)

< 1 > 東京都 K 市 NPO 法人 A : デイサービスの管理者

Q : それでは、幼老複合施設における世代間交流を継続させる要因に関する研究についてインタビューをさせていただきます。

A : はい。

Q : ちょっと基本属性なんですけれども、こちらの施設長さま、お2人のお名前を書かせていただいているんですけれども。

A : まず代表理事が■■■■になります。

Q : はい、わかりました。■■■■さまですね。

A : はい、そうですね。兼保育施設長になりますね。

Q : はい。代表理事が■■■■さまで。

A : 兼保育施設長が■■■■になります。

Q : 保育の施設長ということになっていますね。

A : はい。

Q : ■■■■さんは。

A : 私がデイサービスの管理者になっています。

Q : わかりました。ありがとうございます。

A : はい。

Q : こちらは設立されてから 13 年ぐらいと伺っていますが、同時にこの今のお役は就任ということ。

A : はい、そうです。13 年。

Q : ありがとうございます。それでは、施設、事業所の概要について伺わせていただきたいと思います。

A : はい。

Q : どのような経緯で、このような幼老複合施設を立ち上げたのでしょうか。

A : 私が市内にあります特別養護老人ホームに勤めておりまして、代表理事の■■■■は、その特別養護老人ホームに併設されている総合病院で保育士として働いていて、その総合病院の保育士ですので、社会的入院や障害のあるお子さんが入院されていて、その子たちの保育を代表理事がやっていました。あるとき、院内散歩、欠かせない院内散歩の日々の中で、やっぱり同じ病院の中だと、あの子、かわいそうねとか、ダウン症の女の子だったんですけど、あの子また来てる。まあ、障害があるもんね。かわいそうねというふうにずっと言われ続ける中での院内散歩がちょっといたたまれなくなって、併設されている私が勤めている特別養護老人ホームに会いに行こうか。おじいちゃん、おばあちゃんに会いに行こうというふうに来所しました。

私のほうも、その特別養護老人ホームで、やっぱり、日々世話をする職員と世話をされるご利用者、その一方的な関係と活気を、レクレーションとかいろいろ豊富に取りそろえたりするんですけども、それで活気を得るといのはなんか違うな。そうじゃないんじゃないかなというところに、ちょっと疑念を抱きつつの仕事でしたけども、その日、私ども

のところは代表理事と、そのダウン症の3歳の女の子が散歩に来たら、年寄りの皆さんの顔がぱっと、やっぱり表情が変わって、ベッドで寝たきりの方も手を伸ばして。そのダウン症の女の子もすごく屈託がなくて、会う人、会う人に、おじいちゃん、おばあちゃんというふうに抱かれていく。その光景を、もうその当時は夫婦でしたけども、夫婦でその光景を一緒に見られて。

Q：一緒に見た。

A：そうですね。原風景として、共有した原風景があったということが1つと、その中で、やっぱり施設というのは縦割りで、障害や高齢や保育が縦割りになっちゃってますけど、本来の人間のあるべき関係性というのは、施設であろうが、社会であろうが、自宅であろうが、こういうことなんじゃないかな。ある高齢者施設では支えられるだけのご利用者、病院ではかわいそうと思われている障害を持ったお子さんが直接結び合うと、お互いがお互いを支え合う関係性を発揮していただける。そういったものが必要なんじゃないかなという思いをずっと夫婦で持ち続けた結果のこの[REDACTED]の立ち上げになります。それがもう20代のころですので、だから、十何年ぐらい温めてきてということになります。

Q：今のがもう本当に理念だと思うんですけども。

A：はい。

Q：やっぱり、今、日々、もう13年たちましたけれども、運営のためには何を一番大切にされているのでしょうか。

A：繰り返しもなりますけど、職員がほかの、だいたい高齢者施設でも、障害者施設でも、保育施設でも、職員があいだに入ってしまうということが往々にしてありますし、職員が一生懸命、その対象者のお世話をすることに一生懸命になっている。でも、そうではなくて、対象者と思われてる方、大変だと思われてる方が直接結び合う、その環境をどのように構築していくか。私たちがあいだに立って、何々さん、こちら何々ちゃんです。一緒をお願いしますではなくて、自然と手が伸びる、自然と子どもが来る。それが例えば障害を持った方であっても同じですよ。障害を持った方と貧困の問題を持った方でも、もちろん一緒でしょうし、問題だと思われる、困難を抱えてると思われてる方々は、実はその困難は、私たちがレッテル貼りをしてるだけではないのか。その方が自分自身で困難を、誰かと直接結び合うことで、自分自身で解決していただける、その環境を整えるというところが、すみません、偉そうに。

Q：いやいや。

A：それを日々実現していくというのが、もう施設、私どもの理念の大前提になります。もう1つ言うと、実はその先に、そのきっかけとして、私どもの場所がある。その私たちの場所の関係性がきっかけとなって、今度はその関係性が外に広がって、誰かの支えになった人、誰かに支えてもらった人が、今度は私たち以外のところで誰かの支えになる。今度はその誰かに支えてもらった人が、また誰かの支えになる。いろんな方々の支え合いが広がっていけばというところが理念となっております。

Q：ありがとうございます。じゃあ、やっぱりここで、本当に私たち、朝、来たときから、温かく職員の方が迎えてくださいました。それで、すごく思いやりみたいな感じがあって、とても素晴らしいんですけども、ちょっと職員の、職員あって成り立ってると思うんですけども、職員の体制について聞かせていただきたいと思います。いろんな構成の、専

任とかいると思いますけど、まずボランティアさんとか、支援スタッフとか、ちょっと内訳みたいなのをもしよろしければ、簡単で、ざっくりでよろしいんですけども、教えてください。

A: 定期的なボランティアさんとしては、厨房に入っただく方が毎週1回、おいでいただくぐらいです。そのほかとしては、それぞれ寄り合い所の特色を生かして、いつでも、どなたでもおいでくださいという場所の中に訪れた方が何か手伝っていかれる。自分の時間があるときにふらっと立ち寄って、じゃあ、お年寄りのお相手をしていただくとか、子どもの面倒を見てくれるという感じの支援スタッフ、まあ、支援スタッフとまではいかないんですけど、ボランティアさんとも銘打ってはいないんです。だから、何々さん、ボランティアの何々さんですよではなくて、どこどこ町の何々さんとかって感じで、もちろん、例えば学生さんもいらっしゃいます。何々大学の何回生で、今、こういう勉強してる何々君です、何々さんですという感じでしょうかね。そういう感じで、出たり入ったりしながら、支えていただいている方はもう、無数ではないですけども、何人もいらっしゃいます。

Q: もちろん、こういう介護と保育をやってますから、専門に資格を持っていて、保育士さんとか、あるいは介護福祉士さんとか、そういう専門の方も、もちろん。

A: はい。それぞれの法令に従って、求められている基準を。

Q: あるんですね、基準。

A: はい。

Q: やはりこういうのを開設するには、基準というのが厳しくって、あるんですね。

A: そうですね。

Q: ごめんなさい。

A: 緊張しておりますので。基準をクリアしないと、認可そのものが下りませんので、それぞれに求められている、それは人員配置、あとは面積基準、設備基準というものも含めて、法令にのっとって、特に人数の場合、人員配置の場合は、介護の場合は特にちょっと多めに、介護のほうの人員配置はもう法令では最低限の人数なんですね。で、その最低限の人数をクリアできてるからといって、決して求められる役割を果たせることにはならないので、手厚くとまではいかないんですけども、ちょっと多めに配置をしています。保育は、その法令の基準値を超えてはいないんですけども、やっぱりちょっと人員の確保が難しくって、なんとか基準をクリアできるぐらいなんですけど、結局、保育スタッフも介護スタッフも同じ空間の中にいますので、保育スタッフも高齢者のお相手をする、目配りをする。介護スタッフもお年寄りと一緒に子どもの相手とかもしますんで、目としては倍以上あるというかたちにはなります。

Q: そうですね。なんかもう本当に世の中は、やっぱり研修、研修なんていろいろ言ってますけれども、あえてここの、みんな自然の流れの中で見ながら、こういうふうに接するのかなって、新しく入ってきた人たちは体で覚えて、雰囲気なんか、そんな感じで覚えているように感じるんですね。

A: そうですね。

Q: だから、あえてよくカチンとした組織だとね、介護の人は保育の研修に行きなさいとか、それから、保育の人、お互いにやり合ってるじゃないですか、組織って。

A：はい。

Q：だけど、あえてそういうところに行きなさいとか、命令とかはしない。

A：もちろん、しません。これ行きたいんですという職員がいれば、もちろん、研修してもらいますが、基本的にはもう日々研修、日常が研修になると思います。学んでいく、教えてもらう、それはお年寄り、子どもから、それぞれ教えてもらう姿勢をまずは大事にしてもらいつつ、その姿勢さえあれば、どこでも学べるのではないかなと、偉そうに思っています。

Q：いやいや、それが原点だと私も思いました。なんかやっぱり、介護施設だけ見ても、すごい時間に追われていて、数をとにかく時間の中で、私のずっと介護の経験からも見ると、もう時間でとにかく、おむつの交換しなくちゃいけないとか、追われてるじゃないですか。

A：はい。

Q：それから保育のほうも、寝てるあいだに子どもの記録を書かなくちゃいけないとか、常に保育士さんも介護士さんも、時間に追われてる気がするんですね。ここは追われてないなということを感じるんだけど、この幼老複合施設がなかなか成り立たないのは、けっこうもう介護だけで手いっぱい。

A：そうですね。

Q：それから、保育だけで手いっぱいという、その仕事量の負担というのかな、そこが一番なかなか成り立っていかないところだと思うんですけども、ここって、本当なんか、みんな余裕で、居心地いいじゃないですか。私、初めて来ても。

A：そうですね、ありがとうございます。

Q：2人で話してて、なんか本当に自然なので、多分きっと、もしかしたら、介護の方もスタッフの、保育も福祉士さんの方も、あまり仕事の負担は、大変だということは実感してるけど、感じながらやってないような気がしたんですけど、その配慮みたいなのを教えて頂けますか。

A：おいでいただいた方にそのように伝わるとというのが、もう私たちの一番望むところです。というのは、もちろん、ということ、中にいらっしゃる方もそうお感じになっていただいている場所かな。配慮でしたっけ。

Q：はい、そうです。

A：まず第一的に、介護の施設と保育の施設が単体で存在しているのが日常、だいたい普通の状態。

Q：だいたいがそうですね。

A：そこのそれぞれは手いっぱい。

Q：そう、そうなの。

A：なんで一緒にできちゃうのかというと、手を抜いてるからなんですね。基本的に手を抜いてる。

Q：でも、目が2倍あるということですよ。

A：そうですね。あのね、手を抜くというのは、先ほどのちょっと繰り返しになりますけども、直接介護で一生懸命やるんじゃなくて、環境を整える中でご本人の力をどう引き出すか。子どもたちの可能性や発達をどう導いていくかというのは、直接支援では絶対導き出

されないことでもあるので、まずは環境を整えることに専念します。もちろん、今日でも、車いすの方もいらっしゃるし、食事介助が必要な方も、もちろんいらっしゃいますけども、その食事介助にしても、何々ねばならないとか、何時までにやらなきゃならないとかというのではなくて、その方のリズムに合わせて、うち、代表からもお話を伺いましたでしょうか。特にやることはね、日々ありますけども、時間を決めてしないんですね。

Q：プログラムとかね、ないんですね。

A：そうですね。で、何時までにこれをやらなければいけないとなってしまうと、ばたばたしちゃう。べつに今日のお昼が、いつもは12時ぐらいからだけど、12時半からでも、1時からだって、私たちの生活だって、日々の中でね、早くなったり、遅くなったりします。その個々のお一人お一人のリズムに合わせて、だいたい、じゃあ、次こうしましょうかというぐらいの流れをどれだけ担保できるか。終わらなくてもいい。やんなくても、できなくても、無理だったらやんなくてもいいという手抜きの仕方というのは、やっぱり施設の管理者側の労働環境の中ではすごく重要になってくると思います。あと、いいよ、やっつくよという、それをお互いが言い合える職員の関係性も含めてですけども。私、こっちやってるから、じゃあ、お年寄りの寄り添いをお願いします。みんながみんな、あくせく、あくせく、誰かが一生懸命、例えば、何か準備してたら、私もそこにいないといけないような、やらないといけないような、そういう強迫観念というのは、人間誰でも持ちますけども。

Q：持ちます、はい。

A：それは一人でやればいいだけの話で、お年寄りの寄り添いという、例えば、高齢者施設だったら、お年寄りに寄り添うことが一番の仕事。その仕事をほっぽって準備をするというのは、仕事できない人のやり方だとも思いますので、そこら辺はもう徹底して、職員に理解してもらって、実行してもらえようというのが、本当に心を砕きながらやっています。

Q：本当に世代間交流というと、今までなんか書物とかを読むと、全部仕掛けをしていて、交流させるというプログラムをつくって、歌を歌ったりとか、行事とか、やりやすいのは行事、行事で、行事で交わらせて、そのための行事の準備で保育のほうも大変だし。

A：大変なんですよ、そうですね。

Q：介護もアップアップしちゃって、これはとても無理だということになっちゃうのが大まかなんですけども、本当にこうやって自然なことを見てると、世代間交流と言わなくたって、もうちゃんと自然に交わっていますよね。

A：交じるということですね。

Q：そうですね。

A：交わるということでしょうね。もちろん、世代間交流というのは、一つの代名詞、名称としてアイコンみたいなかたちでね、そういう名称は必要なんだろうけども、その言葉から得る印象よりは、ちょっと若干、もうちょっと砕けてるといえるか、崩しているほうがうまくいくのではないかな。交流しなくてもいいじゃないですか。世代間交流というと、交流しないと駄目になっちゃうので、どうやって交流させようかですけど。

Q：そう、そこばかり。

A：そうそう、一緒の空間にいれば、それは交じって離れて、離れて離れて、またちょっと

近寄って、交じって。それが日常で、それが人間の普通の社会の成り立ちだとも思いますので。

Q：だから、昔はおうちにおじいちゃんやおばあちゃんがいて、自然と近所の、私なんか田舎育ちだけど、おうちにいなかった場合は、隣のおじいちゃん、おばあちゃんが寄ってきたりとか、もうなんか本当に、気が付いたら近所の誰かがうちに上がってきていて、一緒にお茶を飲んでるとか、そういう今、核家族になっちゃったから、おじいちゃん、おばあちゃん、いないけれども、こういうのがおうちにいっぱい、こういう感じでしたよね。お正月とかになったら。

A：そうですね。まあ、もちろんそうですね。

Q：もうみんな親戚の人とか、知らない人も上がったりとか、田舎なんてよくそういうことがあり得るじゃないですか。

A：はい。

Q：だから、やっぱりこういう仕掛けをつくってるとは、とてもわからない。

A：そうですね、仕掛け、なんだろう。あのね、まあ、具体的には、時間の流れを、もちろん、コントロールはしているんです。

Q：もちろん、そうだと思います。

A：そのコントロールの大原則としては、個々人でリズムが、子どももお年寄りも、私たちが個々人でリズムが違いますので、ゆっくりの人のリズムに合わせていくというのは心掛けてはいます。なので、全体的にはゆっくりの仕事になりますよね。

Q：そうです。心が軽くなるというか、のんびりできる。

A：うん。本当にやっぱり、人それぞれのリズムが違う中でそれを合わせようとする、早い人に合わせようとする、無理が生じてくるので、ゆっくりな人に合わせて、それでいいんだという共通理念を持つ、共通理解を持つということだと、力が抜けて、なんだ、いいんだ。やんなきゃいけないんじゃないなくて、やらなくていいんだというのが、いい加減な。

Q：いいえ。

A：本当にそんな感じです。

Q：でも、そのゆっくりとしたリズムをつくって、それでいいんだというのが、全部のスタッフに行き渡るといえるのは、ご夫妻のやっぱり、目に見えぬところで教育というか、経営者として、それは私、感じましたね。だって、もう野放しでいいって言ったら、みんなスタッフ自身が、好きなことしかやらなくなりますよね。

A：ああ、そうですかね。

Q：とかくよくほら、放任とかっていうと、好きな、どうぞやってくださいという、過度に無責任になっちゃって、收拾、よくうちは放任にしていますって、かっこよく言うけど、やっぱりちゃんとどこかで見て手綱をしておかないと、好き勝手になっちゃうじゃないですか。それが私、ここすごいなと思ったのは、ああやって帰ってきたら、まとまっちゃって、本当びっくり。いつの間にか集まってるんですよね、みんな、ああやって。

A：うん、そうですね。なんででしょうね。

Q：なんだろう。

A：まあ、いくつかの複合的な感じが合わさってこうなってると思うんです。それはハード面もソフト面も関わってくると思うので、これだからこんな感じというところまでは

ちょっと言いづらいんですけど、もちろんその職員の関わり方、職員の動き方というのはすごく大きな要素だとは思いますが。

Q：大きい、そうですね。やっぱりそれがお2人の理念が浸透してるの、すごい。2人の生き方を見てるのかな。

A：なんでしょうかね。浸透までは。

Q：だって、さっきも帰ってきたら、近所の人が、犬のお散歩とか、連れていってくれるわけでしょう。ああいうのも、やってって言うてるわけでもないでしょう。

A：本当はね、行ってほしくないんですけど。

Q：やりたいんだ、みんな。おうち、犬を飼ってなかったりするよ。

A：でもね、本当にありがたいですね。

Q：やりたくなっちゃう。

A：そう、うちの犬、しつけがよくできてないので、引っ張っちゃうたりとは、ちゃんとしたしつけをやってるんだったら、お願いします、ありがとうございますと言える。そのちょっとね、躊躇しちゃうのは、そこだけですけどね。

Q：さっきも聞きましたけど、職員間の連動とか、協働とかというのは、やっぱりさっき言ったように、みんなが一つのことをうわっとやるんじゃないかと、ここは私がやるからとか、それが教育というんじゃないかと、自然と協働がなされてる。

A：でしょうね。

Q：きっとね、見てると。みんな声を掛け合ってますもんね。職員間で。

A：分担とまでもいかない。なんでしょうね。

Q：いかないですよ。でも、なんか自然ですよ。やってる、ああ、それか。

A：なので、実は昨日から新しく働き始められました。

Q：いらっしゃるんですか。

A：職員が1名いるんですけど、基本的には、何も覚えないでくださいって言ってます。この雰囲気や、時間の感覚や、そういったものを感じるまでは、動かない、何も覚えない。まあ、名前とかはもちろんですけど、この時間から何を準備して、この人にはこれ、この人はここで、この場所にはここを置いてというのは一切、覚えないでもらわないと、逆に入ってこない。その細かなことは、1年もやってれば誰でも覚えますので、自然と覚えるというところは新規採用の職員には必ずやっていただく。だから、最初はすごくね、居心地悪いみたいです、逆に。やないと、みんな職員が働いてるのに、私、ここに座って。

Q：なんか自分だけこんなんでいいとか。

A：そうなんです。

Q：何やっていいかわかんないし、それってね、言われたほうが、何も考えずに動いちゃったほうが楽ですよ。時がたつという。

A：本当にね、働きに来てるといいうのもあるしね。周りの職員、先輩たちが働いてるのに自分は。

Q：そう、自分だけという。

A：でも、実際は逆だと思うんですよ。先輩は働けるから、わかってるから動いてるだけで。

Q：でも、その目の付けどころ、すごい。なかなか経営者って、お金を払ってるんだから、

もうこうやってください。だから、ここにはマニュアルという、もう今の社会って、会社組織なんて、マニュアルどおりじゃないですか。

A：ああ、はい。

Q：多分、もちろんさっきの理念とか、心の問題とかあるんだろうけど、マニュアルで1番何々、2番何々とか、それがいいんですよね。

A：そうですね。帳簿上はあります。

Q：一応ね。

A：はい。

Q：それは。

A：備えないといけないので。

Q：そうですね。

A：ただ、それは誰にも見せてない。

Q：それかな。

A：なので、ちょっとこれは今回のインタビューのお答えからは外れてしまうところになってくるかもしれないんですけど、この場所をほかでやれるかという、そこもちょっと定かではなくなる。そこが、この場所が、この地域のこの場所に立っていて、窓から見える景色って、お迎えに誰々さんがいて、この地域のあそこに誰々さんが住んで、その地域の方々、この2階には何号室に誰々さんがいてと、全部ね、職員がいて、私たちもいて。

Q：まずここに住んでるといのがすごいですよね。

A：ですかね。本当に全部絡んで、この今の雰囲気になり立つ。1つ欠けても、また変わってきちゃうと思います。当然、1つ欠けたら変わらないといけない。例えば、お年寄りの顔ぶれが、今日と明日では変わってきます。そうすると、雰囲気も変わります。変わらないほうがおかしいので、一つ一つの関わりの中で、その積み重ねがこの雰囲気、それが1つ、違った場合にいいふうに影響を持っていけるかどうか。あれが、あの人がいないから今日はできない。あの雰囲気がないから、あのきっかけがないから今日は駄目というんじゃないで、それをカバーするために職員は違う動きができる。理解していれば、違う動きを補うような動きができるということだと思うんですけどね。私たちは何もしてないんですけど。そう動いてくれてるんだと思います。

Q：それ、大事ですね。今まで13年間、ずっと継続してこられましたけど、お2人で、これは困っちゃったとか、どうしようとか、なんかあったら、1つ事例を教えてください。

A：困ったことはないです。日々困ってますけど、大変ですけど、困ったことは、今のところ、だから恵まれてるんでしょうね。それは、だいたいこの施設の中での困ることという、内的要因よりは外的要因が多く絡んでくると思いますが、たかが保育の施設だったら、もう開設する前から地域からね、反対を受けて。

Q：そう、反対、反対で。

A：その中で例えば、無理してその地域でやってしまうと、もう地域の協力も得られない。そうすると困って、困りごとが施設の中で解決していかないといけない、職員に負担が掛かっていく、どんどん雰囲気が悪くなる。こちらの、本当にこの地域の方々の支えがすごく、具体的に何してくれてるわけじゃないですよ。よお、とかって言うだけなんですけど、

受け入れていただけてるという、そのこと1つだけのその要因だけでも、困りごとが、もし受け入れてもらってなかったら、このやり方でも困ってたようなことがまったくないということにつながってるんだと思います。困りごと、本当にお答えになってはいませんが。

Q：いやいや、もう私は地域の関わり方を聞いたかったんですけど。

A：ああ、すみません。

Q：もうこれは、今、お散歩に行っただけで、もうみんな地域の人、まずみんなスタッフの人が声を掛けて、向こうも声を掛けて、すごい自然だから、どっぷり溶け込んでるのかなって思いますね。一番は、入ってきちゃいけないとは言わず、オープンなわけですよ、ここの入り口が。

A：はい。

Q：だから、こういう施設って登録してないからとか、入れないとか、みんなそうじゃないですか。でも、なんか聞いたら、小学校が終わったら、おうちにかばんを置いて、ここに来てもいいよって。それは■■■■から、お父さまからも伺っていて、ランドセルをぽんと置いて、ここに来てもいいと。

A：はい、昨日も来てました。

Q：だから、みんな受け入れて、お帰りみたいな感じなんですね。

A：うん。

Q：それはすごいと思って。

A：そうですね。ああ、困りごと。困りごと、でも、それでもないな。困りごとという、いつ誰が来るかわかんない。それぐらいですかね。困ってはいないんですけど、だから、職員が、介護の職員、保育の職員、この中で起こり得るすべてのことを連動しながらやっていますので、そこの外からいつも誰かがやってくるかわからない人にも対応はしてもらっていますけど、職員にとっては大変かもしれないですね。

Q：でも、その理念が、今日、ぽんと来た人も受け入れてくれるのね。

A：はい。どなたでも。登録制にしたほうが、時間制、登録制、曜日制にしたら、必ずその日に誰が何をしているのかがわかりますけど、何していいかもね、誰かも、そしたら、初めまして、何が目的で来られたのかも。これはちょっとね、私の口からは言いづらいことでもありますけど、今、いろんな施設でも、そういうリスクというものをどうマネジメントしていくか。外からのリスクというのは防ぎようがない。

Q：そうですね、はい。

A：すごくね、こんなことを申し上げるのはすごく戸惑いはあるんですけど、もう防ぎようがないので、私たちが自分たちの力でそれを防ぐことは、もうしない。どっちかという、この地域そのものを安全というか、どっちかという、包容力のある地域にしていくことで、その地域の外からやってきた人も、その包容力のある地域であれば、監視してるというよりは、何か困ってることあるとか、こんにちは、いい天気ねと言うだけでも、心境が変わるかもしれないところをあてにはしています。

Q：私、勉強不足なんですけど、いろいろ見ると、社会福祉法人とか、NPO法人、特にNPO法人ってよく聞きますけれども、そういうNPO法人というのをまず立ち上げたんですね。

A：はい。

Q：それもやっぱりすごい規制がいっぱいあるんですよね。

A：NPO 法人がありますね。

Q：ありますでしょう。

A：ただ、あの NPO 法人を数ある法人の中から、施設運営するために法人格が必要で、その中の NPO 法人を選んだのは、私たちが思っている理念というものを実現するためには、NPO 法人で法人格を取るのが一番ベターなんじゃないかと。ベストかどうかわかんないけど、ベターなんじゃないか。株式は違うな。

Q：ちょっと違う、はい。

A：うん。で、ワーカーズコレクティブともちょっと違うと。地域の中で私たちがどう地域に寄与していくかという根本的な私たちの理念を実現するための姿勢みたいなものは、やっぱり NPO の姿勢が一番近いかなと。

Q：さっき、■■■■さんから伺ったんですが、今年、10 月から幼稚園が無償化になりましたけど、ここは対象外でしょう。

A：はい。

Q：そうすると、例えば、学校もそうですけど、補助金とか、学校は補助金と授業料で成り立って、私たちはお給料をいただいているんですけども、ここは、どういうところから、この国の助成とか、収入を得ていますか。

A：ええと、収入というのは介護報酬と、保育補助金、保育 1 人につきいくらという保育補助金と、それぞれの利用者負担のみです。でも、だから、経常の収支としては、とんとん。

Q：すごいですね。

A：どっちかが赤でも、7～8 年ぐらいまでは介護のほうが収支がよかったんです。黒だったんですね。保育は赤だったんですけど。今、やっぱりこのご時世なので、保育がいろいろとね、その保育に、保育士、認可が得られてる保育施設に対しての保育補助金以外でも、こういうことをやったらいくら、こういうことをやったらいくらというのがけっこう手厚くって、だから、こんな感じです。一緒にこうなってくれるといいんですけど、一緒に下がることは、それは福祉そのものが社会保障費を大幅削減されない限りは、そうない。まあ、パイの奪い合いになってる全体の中では、その中の動きではあるんでしょうけど。

Q：なるほどね。

A：だから、助成金というものは、今、現状はいただけていないです。

Q：すごいですね。

A：施設立ち上げ当初に■■■■から独自の福祉施策を実行している団体に補助金というのは 2 カ年でありましたけど、でも、民間の団体から、まあ、こういうのは、■■■■ですけど、まあ、そういったかたちでいくつかものはもらいました。お金ですよ。買ってもらったという感じです。それぐらい。

Q：でも、本当、この物件に出合えたということがすごいですね。

A：本当に大きいです。この場所じゃなかったら、どういう雰囲気になっていたかはちょっとわかんないですね。

Q：下の 1 階を借りて、全部ぶち抜きちゃうという発想は建物を見てひらめいたんですか。

A：ええとね、2 人でやるというのはもう決まったあと、物件をいろいろ探してもみたんですけど、最初にイメージしたのは、縁側のある、昔ながらのね、大きな平屋建てのおうち

だったんですが、やっぱりなかなかそういう物件はなくて。

Q：ないですね。

A：そうやって町の中を歩いているときに目に付いたのが、アパートがけっこう。

Q：アパートですか。

A：シャッターが閉まってるアパートが多くて、そのとき、それ全部を借り切っちゃえば、中を抜いて、この木のところはあとから付けたんですけど、造作をしてもらえれば似たような感じになるかな。その町中を歩いているときに、シャッターが閉まってるのが見えてなかったら、もちろんこういうアパートがいいかという、大家さんも多分、助かるだろうしなあと。打算的です。

Q：いや、でも、インスピレーションがすごいですね。なかなかそれ、気が付かない。絶対、結び付かないと思う。長くね、ぶち抜くって。多分これ、もしかしたら、1階だから、地域の子どもたちも、お年寄りも、入ってきやすいというのかな。

A：それはあるかもしれないですね。

Q：ビルかなんかで、エレベーターを押してとかいったら。

A：それはちょっと難しいかもしれないですね。

Q：施設の中では、地域に開放して、地域の方を呼んできて、一緒に施設の方も、行事に参加したり、夏祭りでは盆踊りに高齢者を連れていって踊らせるとか、けっこう盛んにやっている所がありますが、先程、■■■■さんから行事はしないって伺ったので、それはすごいことですね。行事ばかりの保育園とか。夫の母がいたところも、かなり行事があって、家族でおおいに楽しみました。春、夏、秋、冬といろいろあって、夏祭りでは和太鼓の人を呼んできたりとか。

A：はい。

Q：近所の人を連れてきて、介護施設のところでこうやったりとか、一緒に踊ったりとか、そういう感じが多いのですが。

A：見せる、そうですね。

Q：ここを見てると、自然に入ってきて、ここに気が付いたらいるとか、そういうことなんでしょうね、地域との関わりは。

A：地域の中での。

Q：地域のあり方というか。

A：そうですね、関係性というのは、そうあるべきだなという認識は持っています。

Q：そうですね。

A：だから行事をやらないというわけじゃなくて、行事はただ面倒くさいだけなんですけど。

Q：やっぱり、その時間って大変ですもんね。

A：そうですね。行事をやろうがやるまいが、入ってくる地域の方々がいらっしゃる場所はいらっしゃるでしょうし、行事を一生懸命やっても来ないところは来ないでしょうし、それは中の雰囲気、あとは日頃の関わり方で左右されるものでしょうから。

Q：それで終わっちゃいますもんね、終わったら。

A：そうですね。

Q：なるほど。じゃあ、もうちょうど 40 分、最後に聞いてもいいですか。

A：はい。

Q：今まで、13年間やってきて、困っちゃってどうしようかというのは、あまりなかったみたいですが、これからやっていく中でどうしようみたいな課題というのは、何かありますか。

A：課題のお答えとしては、まったくお答えになってないんですけど、いかにこの状態、これが長く続けていけるかで。

Q：そうですね、そこですね。

A：私たちが引退したあと、次の継ぐ者、そこに渡せるかというところは、やっぱり一番の課題だと思います。あの若い職員もいますけども、その職員と一緒にしながらですけど、自然と顔だけ変わっただけで、やってることは全然、雰囲気も変わらないというように渡していけるかというところが一番の課題です。

Q：そうですね。私、やっぱり継続っていうことは絶対大事だと思うんですね。

A：そうですね。自分たちの代で終わっちゃうかというと、ちょっと違うような。

Q：そうですね。やっぱりここまで地域密着してみんなでやってきた。このスタイルがいいのかもね。やっぱりこの建物で。本当にそう。

A：なんか偶然こうなってるというだけだとは思うんですけど。

Q：デイサービスを見ていると、どこもいろいろな地域のところに行って、専門の車の人を雇って、連れてきて、すごいじゃないですか。

A：はい。

Q：保育園も、今、働くお母さんが増えたから、人数がやっぱり多過ぎたりすると、またまた管理、運営が大変だとか、やっぱりこの自然に目が届くというのは大切なことですね。

A：そうですね。規模感としては。

Q：規模感が。

A：お年寄りの数も、私どものデイサービスの定員が12名ですけども。

Q：ああ、12名なんだ。

A：それはね、定員12名、埋めないと駄目ということはもちろんなくて、でも、その稼働率が95%前後じゃないと、単体ではね、ペイできないんです。

Q：なるほど、そうですね。

A：でも、12名の95%なんで、11名だとね、とてもじゃないけど、この雰囲気は出なくて、今、6名前後なんです。1日平均にすると。で、それがベストなので、お待ちいただいているご希望者もいます。6名、だから、50%、稼働率50%です。

Q：ああ、そうですね。

A：保育のほうでカバーできるので。

Q：だから、今度、例えばね、その介護保険は、XXXXXXXXXXの問題になってきますよね。

A：はい。

Q：そうすると、やっぱり市の方と、それからこちらとのそういう推薦とか、けっこう市とのやりとりとか、このスタッフの中でどなたか。(Aさんが)やられているんですね。

A：もちろん、代表(妻)は、大まかなね、代表はずっと市のいろんな職員と関係を、市の、地域の人、いろんな人と関係を結んで、その方々のご協力も得て、支えていただく。で、私は細かいところですよ。

Q：けっこうね、面倒くさいというか。

A：面倒くさい。

Q：大変だと思うんですよね。

A：そうですね。私、役割分担としてはそんな感じですよ。

Q：でも、見ていると、お年寄りを迎えに行って、送って。先程もお散歩から帰ってきたら、ご飯を食べさせて、ベッドに寝かせて。とても感心しました。その人の尊厳を守りながら。他の介護施設なんか見ると、いちいち声掛けをしないで、もう寝るお時間だからと言って、食事から帰って来ると、ベッドに寝かせることが多いじゃないですか。でも、ここでは、この昼間の時間はそんなことできないから、事務的なことをやるのは夜ですか。

A：そうです、そうなりますね。

Q：ああ、やっぱりそうなのちゃう。やっぱり経営者というのは、そういうことなんですね。

A：いいのかなどうか、だから、さっきね、継続していくために、若い子たちに引き継ぐときに、そのやり方でいいのかというのも課題なんじゃないかな。でも、うーんというところも。誰でもできるようなやり方にはしたくない。

Q：そう、それはそうですね。

A：マニュアル化になっちゃうので。

Q：そうですね。

A：そこら辺も課題なんじゃないかな。どのように引き継いでいけるか、引き渡していけるかというのもあるんじゃないかな。

Q：はい。じゃあ、もう会議ですね。

A：じゃあ、ちょっと私。

Q：今日は長いあいだ、本当にありがとうございました。

A：いやいや、とんでもないです。また。

Q：本当に貴重なお話を伺うことができました。

A：とんでもないです。満足にご返答できなかった部分があると思いますので。

Q：いえいえ、じゃあ、これだけいただいていいですか。

A：はい。で、メールかなんかでも、また何かご不明な点があれば、お問い合わせいただければ。

Q：わかりました。はい。今日、本当にいろいろ聞かせていただきまして、本日はどうもありがとうございました。

A：満足にご対応できず。とんでもないです。いえいえ、もう恐縮です。

Q：お忙しいところ、ありがとうございました。すみません。

A：まだゆっくりなさってください。

Q：はい、ありがとうございます。

A：20分ぐらいで終わるので。

Q：はい。ゆっくりさせていただきます。

(終了)

② インタビュー逐語録 (B)

< 2 > 東京都 E 区 社会福祉法人 B : 経営企画本部長

Q : それでは、これから、幼老複合施設における世代間交流を継続させる要因について、施設運営の観点からのお話を伺わせていただきたいと思います。まず、施設の概要について、どのような経緯で幼老複合施設を立ち上げたか、創立の動機のような。始まりは高齢者の施設からと伺っているんですが、そこに保育園が加わったのでしょうか。

B : 法人設立からは、57 年になります。

Q : 57 年になるんですね。

B : まず設立の動機は、昭和 37 年、老人福祉法の前から無認可で養護老人ホーム、養老院を立ち上げました。

Q : すごい。

B : 行き場のない老人たちを収容し、バラックを建てて食事を提供し、というところからの始まりです。その後、昭和 37 年に養護老人ホーム、老人福祉法の制定とともに養護老人ホームになりました。養護老人ホームが 50 名の定員で、その後、昭和 51 年に同一敷地内に地域の方々が、「できれば、八百屋さん、魚屋さんの子どもたちを面倒見てくれないか」ということで、保育園を作ることになりました。そしてそこで養護老人ホームの方と保育園の子どもたちが、大型の行事などでは関わっていました。

次に、建て替えを考えました。昭和 62 年です。その当時、養護老人ホームの方が障害を負うと、例えば、車いす状になると多摩の方に送られていくんですね。最終的には終の棲家にならないということで、特別養護老人ホームというのが、ようやく形になりました。特別養護老人ホームであれば、障害があっても最期まで生活ができる。終の棲家を作れるということで、では、建物の老朽化がございましたので、それでは養護老人ホームと保育園と、そして特別養護老人ホームと、今後、在宅の支援も必要になるだろうということで、高齢者在宅サービスセンター、この 4 つを一つの屋根の下にして、これは東京ならではの土地が無いということですが、4 つの施設を合築型にして 62 年の 4 月からスタートいたしました。そのときに私が事務局長兼高齢者在宅サービスセンターのセンター長という形で、兼務をしておりました。それからですね、XXXXXXXXXX は最期までお年寄りの終の棲家、死ぬまで見て差し上げられるね、という施設になりました。

Q : ありがとうございます。運営のために何を大切にされているかということは、施設の理念に関わることなんですけれども、施設の理念についてお話ししていただけると幸いです。

B : 62 年当初、それではお年寄りと子どもたち、そして、その方々へどんなケアと、どんな保育を提供するのかというところですね、私たち法人職員は高齢者と幼児、そしてその後、障害者施設も建てましたので、これは加えたものです。そして、障害者の幸せ追求者として利用される人々の個性と個別性を重視した、最良のケアと保育を提供しますという理念を掲げました。この理念は利用者本位、そして利用者の幸せがどういう所に幸せはあるのだろうかというものを、私たちスタッフはそれぞれが追求し続けることが大事ということで、幸せ追求者という言葉を使いました。

人というのは、幸せになるために生まれてきたというふうに、私は考えていますので、不

幸であってはいけませんし、そして自分が何かの役に立ち有用感を持ち、そして死ぬときに「本当にありがとう。幸せだったわ」という言葉を残すのが、私たちケアの神髄ではないかと思ってございました。それなので、こういう理念を掲げました。

Q：もう本当に素晴らしい理念だと、共感しております。それではですね、職員の体制についてお伺いしたいと思います。やはり保育者と介護者については専門知識の配置とか確保しているのが、とても私は大切だと思うんですけども、職員はほとんど有資格者でありますか。

B：ほとんど保育園は有資格者です。ところがここ数年、保育士不足というのが続いておりますので、保育補助という形で、大学卒業して3年以内に保育園に就職し、保育士の資格を取れば保育士になれるという制度ができてまいりましたが、やはり根本は専門職、保育士の資格。介護士は、一応加算を取れるので、特別養護老人ホームとか養護老人ホームには配置を適正にしておりますが、介護福祉士の国家資格が取れてからは、9割方、8割方が介護福祉士を取っております。なので、介護の方も専門職。ただこのところの人材不足、少子高齢化という波の中で、やはり無資格者を雇用することもあります。無資格者を有資格者にするという制度を、しっかりと取り入れてございます。

Q：素晴らしいことだと思います。今、本当に介護の世界も人手不足ということをよく聞きまして、できるかどうか分かりませんが、ロボットを使うとか、それから実現できないと思いますけれどもね、そういうのを使ったり、あと今、海外から何かずいぶんと、そういう介護とかの力を借りているということも、ちまたでは聞くんですけども、現在、こちらの施設では、海外からの方も受け入れていらっしゃいますか。

B：実はですね、本当に介護の世界は、今、人材不足です。そしていつも2名ほどの欠員のまま、それは何ていうんですかね、派遣社員で埋めているような状況でございました。ここ数年、去年、一昨年はミャンマーに行きました。今年はベトナムに行ってまいりました。そして、もちろんEPAですとか、それから何だったけな、ごめんなさい。いろいろあるんですけども。そして専門学校が、海外から留学してくるようになりました。

Q：すごいですね。

B：その留学生のアルバイト先として、まず雇用し、そして来年はですね、スリランカ人と中国人の2人を採用いたしまして正社員といたします。

Q：素晴らしい。

B：今後、海外からの人材を受け入れるべく調整をしております、来年にはあと3名ほど入ってまいります。

Q：素晴らしい取り組みだと思います。たぶん海外の方たちも、この素晴らしい施設で理念というかな、本当に毎日の日々のそういう生活の中で身に付いていくと思うので、これは先生が自ら海外に行かれてってということが、素晴らしいかなと思っています。

B：ありがとうございます。

Q：介護の方と、保育の方を適切な配置をしていると思うんですけども、やはり一番大事だなと思っているのは、世代間交流の観点から見ると、交流の意義とか目的に関する、職員間の共通の認識が必要だと、私は思っているんですね。やっぱり世代間交流の理念を理解して、保育や介護の立場でそれぞれ皆さん活動していると思うんですけども、職員間の連携とか協働がなされていらっしゃると思いますが、そういった事例を教えてください。

けますか。

B：まず、世代間交流がしっかりと根付くというところでは、新人教育の中で世代間交流の勉強をさせています。「世代間交流とは？」というところで、私の書いた本がございすが、その本を元に実践をしてもらって、交流をしている部分を見て、そしてこの施設での世代間交流を軸にした介護と保育、それを学んでもらうという取り組みをしています。

それともう一つは介護職と保育職が、一緒に一つの行事を作り上げるというところでは、協働しないとどうしてもできませんので、情報共有を密にし、そしてその結果どうだったということ、必ず残すというのが大切かなというふうに思っています。そのためにも、プラスαでセクショナリズムを廃止して、横割りのスタッフが「ふれあい促進委員会」をつくっています。例えば、看護師、介護士、保育士、事務職、それからケアマネージャー、ドライバーの果てまでですね、

Q：すごいですね。

B：そういう人たちが「ふれあい促進委員会」をつくり、そしてどのようにしていくか、どういうプログラムをつくっていくかということ、毎月一回、委員会を開いています。

Q：この取り組みは、素晴らしいと思います。となく、職員となっていると、専門職の保育士と介護士だけで協働と考えると思いますけれども、私、今、感動したのは、やはりドライバーさん、事務職員も含めてということで、ドライバーさんは、デイサービスなんかの送り迎えとかで本当に安全に命を預かっていて、そこで触れ合っていますよね。ですから本当に、やっぱりドライバーさんも入れていただけるというのは、すごく私は素晴らしいと思います。

B：ありがとうございます。

Q：偏っていない全て、それがこちらの施設のやっぱりスタッフの全てなんですね。どうもありがとうございます。

B：ありがとうございます。

Q：それでは、今、研修のお話も伺いましたけれども、私の研究は運営の観点からの研究ですが、今までこのように本当に長い歴史がある施設の取り組みの中で、何か困難にぶち当たったことがあったとしたら、そういうとき、どういうふうに対処してきたのか、もし差し支えなければ、教えていただけますか。

B：まず、感染症というのは、子どもに付きものですし、例えば、リンゴ病であるとか疥癬とかインフルエンザであるとか、それから 62 年当初、ショートステイが入ってきたから、疥癬というのがありましたね。

Q：かゆくなっちゃうんですね。

B：かゆくなって。あれは情報開示をしない限りまん延して、ご家族にご迷惑を掛ける。ショートステイですからね、在宅の方々なので。私は直ぐクローズにしました。この施設ではそれまで、62 年までの、昭和 37 年から一度も疥癬は出していないんです。

Q：本当ですか？

B：ところが、ショートステイができたのが 62 年でございますから、その年に疥癬が出たんですね、夏ね。直ぐに、私はサービスをクローズしました。情報を開示しました。

Q：素晴らしいことですね。

B：そしたら、周りの施設の人たちが「そんなこと言っちゃっていいの」って言いました

けれども、じゃあそれがうつって、保育園の子どもが持って帰り、親御さんが「かゆいんですけど」って言ったときにどういう責任を取るのかというので、1週間全部クローズして消毒しました。

Q：すごい。

B：そして、それも全部区役所に届け、今は届け出るのが当たり前になりましたけど、もう全部、情報開示しました。

Q：本当に素晴らしいことですね。

B：そして全部対策を取った後、もう一回開始しましたが、それ以来一回も出ていません。

Q：そうでしたか。

B：それから例えば、子どもの病気ね、頭ジラミなんかも出ますし、感染の有無、感染のまん延があるよという場合には、交流はやめます。例えば、見世物じゃないので、例えば、「見学に来たいんだけど」と言っても、「今はインフルエンザがまん延しています」とか、「そういうことがあるので交流はしておりませんがよろしいでしょうか」と聞くようにしています。なので、そういうときには、交流はしないというのが原則でございます。

Q：他に子どもが苦手な高齢者への対応とかはありますか。

B：子どもが大嫌いな人がいたんですね。それから子どもたちは日課の中でお年寄り、寝た切りのお年寄りが多いので、特別養護老人ホームの方に出向いて行って、3階まで出向いて行って、お年寄りの部屋をお訪ねしています。「こんにちは」って、そしてベッドの周りで紙芝居と一緒に読んでもらうとか、お歌を歌って帰ってくるとか、子どもたちと交流するために1階に下りられない人を対象にやっています。

その中でも認知症が入っていたり、ちょっと認知症で暴力行為があったり、それからよだれが垂れて車いすに乗って、すごく汚らしい状況の人もあります。子どもが「何でそういうふうによだれが出て汚いの？ そのおばあちゃんに触りたくないわ」って、今度子どもの方が言うらしいんです。そしたら保育士の課長がこう言ったんですって。「君たちも本当に生まれてすぐのころは、よだれをいっぱい垂らしていたんだよ。おばあちゃん、おじいちゃんも、お年を召すとよだれが出てきちゃうんだよ。だから汚いことではないんだよ」っていうふうに話をしたりですね、それから、子ども大嫌いなおばあちゃんは無理無理に接触させませんが、行事のときに「下りてきてください」と言いながらですね、来るように促す。子どもと関わるように少しずつ促していくうちに、かえって好きになってしまうということもありますし、どうしても拒絶反応がある方については、お部屋にいてもらうということで、無理をしないというのがこの施設の鉄則でしょうか。

Q：どうも、良いお話をありがとうございました。そうですね、子どもやっぱり高齢者の現実を見せて、自分の子どものときもこうだったということが大切ですね。

B：そうですね。

Q：ありがとうございます。そして何といたっても、やっぱりこの施設の中の合築の中での交流というのは、このように日常的に自然に行われているということが、今お話を伺ってよく分かったんですけども、やはり、私たちは地域の中で生きていかなくちやいけない共生社会ということですので、施設の一部を地域の住民に開放するなど、地域との関わりについてちょっと事例を踏まえながら、お話しいただけたらと思います。

B：一つは、中学生の夏期体験ボランティア。

Q：あら、素晴らしい。

B：子どもたちが、こういう特別養護老人ホームに5日間続けてボランティアに来ることで高齢者を実感する、高齢者に対しての理解が促進されるというのもやっていますし、ついこれから行くんですけども、小学校の6年生を対象に「高齢者疑似体験」というのを、うちのスタッフ総出です、行って、高齢者というのはこれだけ足元が危なく、車いすに乗っている人もいるし、目の見えない人もいますよ。杖で歩いている人もいますよ、体験してもらおうというのを、もう十年ぐらい続けていますでしょうか。

そうすると、介護をするということもそうですが、高齢者を身近に感じ、そして福祉社会をこれから担う子どもたちに高齢者の疑似体験を通して、福祉社会のあるべき姿、「じゃあ手助けってなあに？」っていう話とかですね、それから認知症高齢者に対しても搜索訓練のようなものやっています、子どもから住民に参加をしていただいて、そして高齢者の認知症の方が、もしうろたえていたときに、どのように対応すればいいのか。それから認知症サポーターというシステムがありまして、それはもう、小学生から大人まで取れるように地域包括支援センターが私たちの法人として指導して、そしてサポーターの資格を取っていただくという実践も続けております。

Q：素晴らしいことですね。高齢者の疑似体験というのは、具体的にいうと、例えば、車いすに子どもを乗っけたりとか、目が見えないということは、ちょっと目が見えなくするとか、そういう感じを、実際に体でやらせるということですか。

B：そうですね。坂道を作って車いすを押してね、下りたりね、それから目の見えないゴーグルを掛けてそして杖で歩いてみるとか、どれだけ危険があるかとかですね、しゃべれないというのも体験するとかですね、そういうふうに高齢者の、何ていうのかな、高齢者になると、いろいろな障害を持つということを経験することで、子どもたちが老人の理解をし、そして社会の中でどういうふうにお年寄りと接したらいいのか、お助けできるものは何なのかというふうを考えられるような、教育というところに踏み込んでおります。

Q：それは本当に素晴らしいことだなあと感じます。そして、やっぱり子どもたちと高齢者、それからこの別の施設では、今度は障害者もいらっしゃるんですね。そして私も伺ったときに、障害者のお母さんたちも1階のカフェで働いていらっしゃるってことで。そして、障害者の人たちも見まもり隊みたいなのも、やっていらっしゃるんですかしら？

B：障害者もそうですね。

Q：それは、この辺をパトロールしているってことでしょうか？

B：知的障害者の当初は通所更生施設、今は生活介護施設になりましたが、「障害者は、何の役にも立たないじゃないかと、税金の無駄遣いじゃないか」というような声がありました。私は、障害者は仕事をしにきているというふうに思って、学校の横断の所に町会、自治会の方とPTAの方が交代に旗を持って「子ども見守り隊」というのを[]区では推薦しています。推奨しています。ところがPTAも忙しい。町会、自治会の人でも高齢化しているという中で、私たち障害者もその見守りはできなくても抑止力にはなるんじゃないかということで「子どもみまもり隊」という腕章を[]区から頂いて、そして利用生と職員が腕章を付けて散歩に行きながら、清掃活動をしながら、子どもを見守っていますよという、何ていうのかな、お仕事をしています。そして何人かで行けばですね、そういう悪さをする人の抑止力になる。それはすごいことだと思いますね。仕事をしている、人のた

めに役立っている障害者がいるというのは、私は本当に、残念ながら障害者は■■■■の事件もそうですが、無用の長物というふうに思われて久しいんですが、私はすっごくね、お仕事のできる、そして心の優しい人たちが集まっていると思います。

Q：本当に。

B：だから、その方たちに有用感、やっているんだという気持ちを持ってもらえると一生懸命やるんですね。

Q：本当ですね。

B：それはすごいですね。

Q：すごいですね。

B：私、障害やってよかったのは、本当に純真無垢な人たちが、そして障害ということで差別をされ続けてきた親御さんと本人たち、それを解放したような気がいたします。

Q：本当ですね。本当に素晴らしいことだと思います。

B：やっぱり、自分たちも何かに役に立つということ、それが本当に障害者も、それから高齢者も生きがいとなると思います。この見守るということはすごいことだと思います。今、抑止力になっているということ。

Q：私が以前こちらの施設にお伺いした時に、高齢者と体操を終わった後に子どもたちがゴミをこの近くで高齢者と一緒に拾っていました。それが障害者の方々も歩きながら、やっぱりゴミを見たら拾うっていう、自然な日々の行動を行っているということなんですね。これは、感動的なお話だと思います。

ここの保育園で育った子どもたちなどが大きくなったときに、こちらの施設で働いているという事例はありますか。

B：はい、それがですね、ここ数年、本当に見事に保育園で育った子どもが介護士になり、保育士になり、今、現在、ここには7名おります。

Q：素晴らしいですね。

B：介護士と保育士を取った職員がですね。今年の4月にも、保育園の卒園児が介護の世界に入ってきます。

Q：今年また新たに？

B：また1人。

Q：素晴らしい。

B：これで8名になりますね。

Q：すごいですね。

B：だからやっぱり、生まれ育った川にまた鮭が戻ってくるというふうに、私はとてもうれしく思っています。これ私の研究として、この8名についてどのように育ち、そしてどのような経験を経て、ここにもう一度帰ってきて保育士や介護士になろうとしたのかというのを、一応インタビュー形式で取りたいなというふうに、それだけは思っています。

Q：ぜひお願いします。たぶん、この幼老複合施設での高齢者や子どもに関する研究はいっぱいありますが、子どもが成長していく追跡の研究は私が調べた中でないんです。ですから、先生ぜひ、もうここで実際に育っていったわけですから、ライフワークとしてお願いしたいと思います。この追跡こそ大切で、本当に経験して職業として生きていくっていう、こんなに素敵なことはないですね。私も良いお話を今日、伺いましたので、これが本

当に大きなここの施設の原点の理念につながる宝物だと、思います。

B：ありがとうございます。

Q：学校法人の場合には、子どもたちからのお月謝と、国や県からの補助金からなっているんですけども、社会福祉法人って、勉強不足なんですけれども、ある程度、今、介護をやっていたら、介護保険の方からとか、今、保育園も認可されていれば3歳以上は無償化とかなって、そういう保育料とかそれから介護保険料とか、そういうので賄っていらっしやるんでしょうか。

B：今の経営は介護保険になってからは、老人施設はそうですね。特別養護老人ホームと在宅サービスとホームヘルパー事業とかですね、ケアマネさんのいるような事業、それに関しては介護保険料と、それから介護保険の9割負担の国、東京都と区の社会保険方式の単価で経営をしております。ただ、養護老人ホームと保育園は半措置でございまして、お金に関しては、区が保育園は窓口ですね。それから養護老人ホームは東京都と区でございますから、措置費の中で賄われています。なので、うちは介護保険と保育の措置費とそれから養護老人ホームの措置費、そのあとは区の委託事業。例えば、地域包括支援センターは区の委託事業でございまして、それから新しく建ちました施設は、共生社会をにらんで
区が独自に居場所づくり、相談場所としての居場所づくり、障害から高齢から子どもというところでの区の委託事業でございまして、なので、3つ、4つですかね。そんな感じのお金の入りどころがありまして、経営をしています。

Q：ああ、そうでございましてか。私はやっぱり長く、そして人手不足にならないように、自分の経験からも介護士さんとか、保育士さんが、やっぱりモノを扱っているんじゃないかと人の命を預かっているの、そういう人たちがもっとも国の方で助成金をたくさん下さって、お給料とか福利厚生とか、そういうのを豊かにしてくれる社会になってほしいなと思います。先生ぜひ、区の議員さんとか東京都の方とか、あるいは国の国会議員とか、そういうところに働きかけて、本当に福祉社会にしてほしいですね。

B：本当に今のお話、私、共感します。というのは、これからね、共生社会ですと言って、「じゃあ、あなたたちで例えば、ボランティア意識でね、住民の方々助け合ってやってくださいよ」だけでは済まないと思うんですよ。

Q：そう、済まないです。

B：この国が持続可能で行くということは、結局、福祉社会であればこそ、持続可能だと思います。

Q：そうなんです。

B：経済は、いつか底を打つんですね。

Q：そうです。

B：例えば、資源だとか電気だとか、何とかがいうものは使ってしまうと無くなってしまっても、人と人が関わり合うということは、持続可能な社会にとってどれだけの効果が、費用対効果が、私は現れるのかなど。だからそのためにも、私はこの「世代間交流をコアにした福祉社会の創造」という論文を、一度書かせていただいたことがあります、なかなかそこに踏み込んでくださる政府の方がいらっしやらないというのは、とても悲しいなあとというふうに思っています。

Q：そうですね。先生は、もっと声を大にして、私も本当に声を大にして何か国に働き掛

けたい、本当にそう思います。

B：ありがとうございます。

Q：本当に何ていうのかな、知識とか学問じゃないんですね。先生の生き方そのものが、施設の理念につながっていると思うんですけれども。さっき理念の所で伺ったように、やっぱり「ここに集っている人たち、高齢者もそれから子どもたちも障害者も、みんな人として幸せの追求」って、良いお言葉を聞いたんですけれども、そして幸せになる権利があるし、死ぬときに生きてきてよかった、さっきおっしゃいましたけど、「ありがとう」という気持ちで召されるということが一番幸せなことで、素晴らしいことは「それを支えることが喜びで幸せである」とおっしゃってくださった、本当に温かいこちらの施設だからこそ、私が求めている幼老複合施設における世代間交流が継続している要因は、そこにあると思うんです。最終的には、やっぱり人と人のつながり、温かさ、幸せの追求、そこがあるからこそ、この施設は日本でやはり一番長く続いている幼老複合施設の在り方を実践されていると思います。

B：ありがとうございます。

Q：本当に感動的なお話を聞かせていただきまして、うれしく思っています。今抱えている課題が何かありますか。

B：人手も、もちろん足りないんですね。少子高齢化のこの最先端を行っている日本は、この先、どういうふうに残っていくのかなというふうに思うんです。人口の減少というのは、国力に関わるわけですから、

Q：即つながります、そうです。

B：子どもができなければいけないし、私は外国人の留学生や外国人を介護士や例えば、保育士になれるかというか、なってもいいんですけれどもね、例えば、留学生がここで働いたとしても、この国にね、子孫を残してほしいんですよ。

Q：やっぱりね。

B：例えば、もうね、ハーフだ、クォーターだっていうのが、当たり前にならないとですね、

Q：当たり前、そうですね。

B：私はこの国が変わらないと思うんですよ。何か先だってね、ある方が「2000年も同じ血で日本人はいたんだ」みたいなこと、ちょっと忘れかけていたような話があったんですが、一番遅れているのは、逆に言うと、外国人をどれだけ登用して、そして一緒に差別せず共生社会をつくるかなんですよ。

Q：そうです。

B：共に生きるというのはですね、私、今回の、国の共生社会イコール、例えば、インクルーシブ社会。例えば、障害も高齢も子どももなんだけど、そこにうちの理念の基本方針の最後にですね、3つ目の「施設と在宅、健常者と障害者、幼児と老人、そして人種の別も超えた真の福祉社会の創造を目指します」というのを、62年当初に、私がつくったんです。

Q：すごい、62年ですか。

B：はい。

Q：すごいですね。

B：これはですね、外国人がもし帰ってきたときに、今のような就労ということではなくて、例えば、ブラジルの三世さんが日本に戻ってきて、さあ老人ホームに入ります。ブラジルのご飯が食べたいわ。じゃあコリアンの人がここで老人ホームに入ったとしたら、どうするっていうことを考えた。

Q：なるほど。

B：それと今の労働条件。例えば、日本人だから、外国人だからではなくてですね、それから正規も非正規も超えて、どういうふうな人も一緒に働く時代が来るよというのは、62年当初に言っていて、「日本人だからといって優遇される時代は終わるかもよ」というのを言っていたのですね。

Q：もうすでに62年にですね。素晴らしい。

B：なので、この基本方針を、3つ目を、本当に人種の別を超えたということと、差別ということ。私たちが目指しているのは、幸せ追求者イコールですね、差別を許さないということなんです、福祉社会というのはね。だけど、インクルーシブ社会が障害者の何とかだって叫びながらも、その差別をするという日本人気質、これがなくなると、この国は良くなっていかないかなと思う。

Q：そうですね。

B：外国人に助けてもらわなければ、そして外国人の子どもを差別せず、ハーフ、クォーター、何とか、どんだん子どもを生んでもらう社会になっていかないと、私は本当の意味の、この日本の福祉社会ができないのではないかなと思っています。

Q：本当にありがとうございました。もう、幼老複合施設のお話からずっと広がって福祉全体、そして強いて言えば、日本の将来の福祉国家の在り方というものも聞かせていただきました。

本当に心温まるお話は、やはり先生が本当に30年以上も実践されて自らが全て体験されてきて、そして、先へ先へといろいろなことを大きく捉えて、実践されてきたからこそのお話だったと思います。

本日はお忙しい中、貴重なお話を伺わせていただきましてありがとうございました。

B：こちらこそ、ありがとうございました。

(終了)

③ インタビュー逐語録 (C)

＜3＞神奈川県H市 社会福祉法人 C：ケアハウス・デイサービスの施設長

Q：これから、「幼老複合施設における世代間交流を継続させる要因」について、施設運営の観点からのお話を伺わせていただきます。

まず、こちらの高齢者施設の概要について、教えていただきたいと思います。

C：この施設は3事業所が入っております。1つはケアハウスという、入居者用の施設ですね。2つ目がデイサービス、通所介護ですね。デイサービス。あと3つ目が居宅介護事業所といたしまして、ケアマネジャーの事業所という形の、この3つの事業所が入っているという形ですね。

ケアハウスというのが、ちょっとあまり、皆さん聞き慣れない施設だと思うんですけども、ある程度、自立をされた方が入居するという施設です。今までの従来型のケアハウスというのは、自立をしている方で介護が必要となると、介護をしてくれる施設に移らなければいけなかったんですけども、ここは、特定施設というものを取りました。最近、特定施設というのがだいぶ注目を浴びるようになってきましたけれども、建って13年たちますけれども、13年前には特定施設ってまだ珍しい施設だったんですね。

それはどういった施設かという、介護保険を使ってサービスをするという施設が特定施設という形です。ですので、有料老人ホームというのは、介護付有料法人ホームというのは、だいたい特定施設というのを取っているという形ですね。ですので、ここも入居するときは、比較的ある程度身の回りのことをご自分でできる方ということで、その後、介護が必要になった場合には特定施設という、お部屋が変わるわけでは、何も変わらないんですけども、特定施設という契約をしていただいて、介護保険を使って引き続きサービスを行うという施設になっております。

Q：素晴らしいですね、初めて伺いました。ありがとうございます。こちらのお隣に施設がありますが、保育園ですか。

C：はい、そうです。

Q：保育園ということは、ゼロ歳からですか。

C：そうです。認可保育園になっております。

Q：そうですか。ありがとうございます。認可なんですね。

C：認可保育園です。

Q：ありがとうございます。施設運営のために施設長さまとして、何か大切にされていることってありますか。こちらの社会福祉法人の理念にもつながると思いますけれども、どんなことでも、小さなさやかなことでもいいんですけども、教えていただきたいと思っています。

C：もちろんここにご入居されている方、ご利用されている方々が、今までと同じような生活が送れるようにということを、第一にというふうにはもちろん考えてはおりますが、それプラスやはりそれを支えるスタッフですね、スタッフがやはり気持ち良く仕事をできないと、そこには還元されていられない。やはりスタッフが働きづらいとなると、スタッフの笑顔もなくなりますし、そうしますと、実際そこを利用されるお客さまに対しても、

良いサービスを行いことができなくなってしまうというところで、まずはスタッフがとにかく気持ち良く働けるという、そこが大前提で、もちろんそれと並行して、お客さまも楽しく今までの生活をというのがありますけれども、もっともっとも根底のところでは、スタッフが働きやすい職場という、大前提にあるかなと思っております。一番やはり、よく最近では人材と言われますけれども、そこがやはり一番大事なところかなというふうに思っております。

Q：ありがとうございます。私も一番スタッフを大切にする施設、それが本当に日々のことで心から気持ち良く入居さま、あるいは通ってくる方たちを優しい気持ちで、本当に心から義務ではなくって、気持ち良くお世話できるっていうことが、やっぱり本当に働く生きがいにつながるということが、私も働く立場としてそのように思いますので、そのお話を聞いて一番すごくうれしいです。ありがとうございます。

こちらは、子どもの施設をを併設していますが、高齢者にとっても子どもにとっても、何か交流するっていうことがとても大切だと言われてます。確かに高齢者にとっても子どもと接することによって、ちょっと元気が出たりとか、それから自分たちが今までずっと生きてきたことで、何か子どもたちに教えてあげたいとか、お役に立ちたいとか、そういうふうな何かきっと生きる喜びみたいなものを子どもを見ることによって、あるいは昔を回想することによって、すごく高齢者にとっても元気が出ると思いますし、今、核家族の時代ですので、子どもにとっておうちには、おじいちゃまやおばあちゃまはいないですね。それからまた、子どもを育てるパパ、ママも、もうすでに、おじいちゃまやおばあちゃまはいなかったと思います。昔は本当に、おうちにいなくてもお隣のおうちにおじいちゃま、おばあちゃまがいて、みんな声掛けをしたりとか、そうやって大家族っていうか地域でもそうやって生きてきましたけど、今そういう状況にないので、きっと子どもたちは高齢者を見たときに、弱弱しい、そういう高齢者の姿を見て、近づきにくかったり、また親御さんもそう思っているかもしれないですね。

こちらの施設では、子どもたちの保育園がすぐそばにあります。どのように交わっているか、事例があったら教えていただけますか。

C：年間行事として、もう保育園と一緒にやるというのが、いくつか年間の中に設定されています。その中の大きなものとしては、まず隣の保育園の運動会に、これはケアハウスに入居されている方々と一緒に応援に行ってます。

高齢者施設からという形で、この子たちに記念品をお渡しさせていただいているんですね。その授与をする役割を、この入居されている方々をお願いをしています。ですので、運動会に毎年行って、入居されている方全員が行かれるわけじゃないんですけども、何人かが行って、こちらで用意した記念品を、子どもたちに渡すというお仕事をさせていただくという形ですね。それはけっこう、大きなお仕事のひとつかなと。

Q：そうですね、子ども達にあげるということが、お役目を果たすっていうことですね。

C：そうですね、果たすっていう。

Q：素敵なことですね。

C：それをしているというのと、あと、もう一個大きなのは、ハロウィーンですね。ハロウィーンときは、デイサービスの方には、デイの方に子どもたちに来てもらっています。これも私どもの方が子どもたちに渡すお菓子をを用意して、子どもたちがちょっとそこで

遊戯だったり歌を披露してくれて、その後にデイサービスをご利用のお客さまが、子どもたちにお菓子を渡すというね、のをやっています。これはデイサービスの方ですね。ケアハウスの入居の方に関しましては、各お部屋個室になっていますので、子どもたちが一軒、一軒ちゃんと回って、

Q：すごいですね。

C：言葉を言って、入居されている方が、そこで子どもたちにお菓子を渡すというのをやっています。

Q：そのお菓子は、こちらで用意しておくのですね。

C：そうですね、用意しておきます。

Q：たぶんお年寄りにとっても、ハロウィーンって、珍しいことでしょうね。私の子どものころなんか全然知らなかったことですから。

C：ハロウィーンは、なかったですね。

Q：すごく新しいことだけれども、子どもたちにお菓子を渡すということはそこで体験できて、子どもたちもお菓子を頂いて喜ぶわけですね。

C：そうですね。ハロウィーンは毎年やっていますね。デイサービスのお客さまも、子どもたちに渡したいんですね。なので、その人数関係もなかなか難しく、調整がね。だいたい、ここ各学年一クラスなので、一クラスずつだいたい来るんですけども、そうすると、だいたい25名ぐらいで、デイサービスご利用の方が35名ぐらいいるんですね。

Q：ぴったりいかないんですね。

C：そうです。そこがね、なかなか難しく、先生に渡したりとか、子どもたちは2つもらっちゃったら不公平になるということで、

Q：そうですね。

C：一つはダミーの袋で渡したりとか、いろいろして、とにかくこちらのデイサービスのお客さまも、みんな子どもたちに一個ずつ渡せるようにという形で配慮はさせていただいています。

Q：そうなんですか。これは年間行事を通して触れ合うということですが、日々は入口のところで通所のデイサービスの方と子どもたちが帰るときに一緒になるとか、ありますか。

C：それはないですね。子どもたちもさまざまな時間ですからね。

ただ、ここの保育園が園庭の無い保育園なんですね。ですので、遊ぶ場所としては2階のベランダか、屋上なんですね。それ以外はもちろん外の公園に保育士たちが連れていってということはあるんですけども、2階で遊んでいた。2階がデイサービスですので、つながっています。そこで子どもたちと触れ合えるような形というか、自然に子どもたちが遊んでいるのを見れるというような形ですね。

Q：素敵ですね。

C：ケアハウスの方では西側に立っていますので、西側の方に行けば、子どもたちが聞こえるということで、お部屋も子どもたちの声が聞こえる部屋がいいということで、西側を選んでいる方もいらっしゃいます。

Q：本当に子どものいる存在を感じることができるのですね。

C：そうですね。

Q：それはいいことですね。自然に。

C：今、お一方は、ひ孫ちゃんが保育園に行っていて、お孫ちゃんが自分の子どもをお送りするときに、おばあちゃまをデイの方に送って来るっていう方も、お一方いらっしゃるし。やはりご入居されたり、デイサービスを利用される基準として、孫が、ひ孫が隣に来てるからという基準で、こちらを選ばれている方もいらっしゃいますね。

Q：それはとても素敵なことで、良いことだと思います。やっぱり家族のつながりっていうかね。

C：そうですね。

Q：だからやっぱり、この社会福祉法人は、信頼関係があるっていうか、保育園とのつながりがあるからこそ、でしょうね。

行事を通してつながっているの、そういうときに介護の職員の人たちと、保育士の人たちは、職員同士のつながりはありますよね。

C：そうですね、打ち合わせで。

あと一つ、もう一つは、子どもたちがお遊戯や歌の練習をね、発表会のためにしても、結局は一回しか発表する場所がないんですね。ですので、もう一カ所発表する場をということで、卒園児は3月のときにこちらにもう一度来て、今まで練習してきたお遊戯をやってもらってます。

あと、夏祭りのための盆踊りを練習したり、子どもたちのおみこしをね、作ったり、この保育園もしているんですけども、結局それもお披露目する機会が一回しかないです、デイサービスの夏祭りを毎年やっていますので、そのときに子どもたちに来ていただいておみこしをやったりとか、子どもたちの盆踊りをここで踊ってもらったりというようなね、形は取っていますね。

Q：いいですね、とっても。高齢者の人も喜ぶますでしょうか？

C：そうですね。

Q：子どもたちは、やっぱり高齢者に見てもらおうというので、ちょっと張り切っちゃうとか。そういう行事には、保育園の保護者も来る場合がありますか。

C：そうですね、保護者は来ることはないですね。

Q：働いているから、幼稚園とそこは違うところかもしれないですね。

年間の行事は今、お伺いした中でハロウィーンとか、それから夏祭りとか、あと卒園時のときとか、大きなものはそんな感じですか。

C：夏祭り。そうですね。あと、お餅つきと、

Q：お餅つきもあるんですか。

C：そうです、そうです。スイカ割りと。ここは学童保育もありますので。学童保育の子どもたちが、夏休みはスイカ割りを一緒にやったり、あと、デイサービスのおやつ時間に学童保育の小学生が来て、デイサービスのお客さまにおしぼりを渡したりとか、お手伝いをお願いしたりという形ですね。

Q：いいですね。学童保育もやっていたんですね？

C：そうですね、学童保育もあります。

Q：ああ、なるほど。そうですか。かなり、いろいろ行事を通して触れ合っているということですね。

C：そうですね。

Q：今までいろんな交わりをやっていく中で、何かちょっと大変だなという事例はありましたか。先程、伺ったハロウィーンのお菓子あげたりするときの人数調整とか。

C：そうですね。たまたま行事でぶつかって、インフルエンザだということも今まであったんですけど。あと、こちらの保育園の作品展のときに、ケアハウスの入居者が一緒に行ったりもしているんですね。そういうときに、そのころがね、ちょうどインフルエンザがはやったりっていう時期で、今までも中断したことはありますけれども。

Q：そのときはね、弱い者同士なので。

C：そうですね。

Q：地域と共についていうことが大切だと思うんですけども、地域の皆さまと何か交わることはありますか。

C：今ね、ちょっと中断しちゃっているんですけども、以前はデイサービスが終わった後の部屋を開放してまして、老人会の人たちがカラオケに来ていたんですね。私どもの所に通信カラオケの機械がありますので、そこは無料で使ってくださいという形で。お茶だけは私どもで用意させていただいているんですけども、そこのお茶菓子とかそんなものはご自分たちでご用意いただいて、こちらで歌を歌って、1時間か2時間ぐらい歌って帰られるということもね、していたこともあるんですけども。最近、老人会自体があまり活発ではなくなってきたということ。

Q：ああそうですか。

C：最近では利用されていないんですけども、ちょっと前まではそれはやっていましたね。あと、災害時の受け入れという形で、今、実際にこれそんな大きな災害ないんですけども、その辺は今、この地域の人たちと、その辺のいざこうなるときは、ここで受け入れをという形のね、打ち合わせは今やっているところです。

Q：そうですか。それは本当に南海トラフとかね、いつ起きるか分からないし、地域とそういう連携をすることは、大切ですね。

C：そうですね。

Q：高齢者施設だと、自家発電とかそういうのがありますか。

C：ここはね、緊急時用のものだけで、保育園の方に持っているんですね。なので、保育園の方でという形には、なるんですけどね。

Q：ここは、地域の方も頼りになる施設ですね。

C：そうですね。この辺だと地域性もあるでしょうけれども、あまり高い建物がないんですね。

Q：じゃあ安全ですね。

C：なので、そういった意味では。また川も近い所なので。

Q：先程、事業所の成り立ちをお伺いしたのですが、ここに入居されている方は、初めピンピンしていて、入ったときはもちろん有料だから、全部自費になるわけですよね？

C：自費というか、ご自分でやっていただく感じですね。

Q：ご自分で全部やって、そこで介護認定を受けると、介護保険が受けられるので、そうすると、運営の面から見ると、財源は介護保険からということですか。

C：そうですね。

Q：あと、国とか、自治体からの助成みたいなのはありますか。

C：ケアハウスとしてはあります。ただ、建物自体が受けられてないんですね。それは子どもが複合施設で、子どもたちも使ったりという、そのの住んでいる人たちだけのものではないので、建物としての助成は受けられてないんですね。

Q：そういうものなんですね。ありがとうございます。私、そこを知りたかったです。だから、幼老複合施設ってなかなかないですよ。

C：そうですね。

Q：ここの施設では、スタッフを大切にしていると伺って嬉しく思いましたが、職員の皆さんはお休みをとれていますか。

C：そうですね。ここね、人員基準以上に人がいるので。何とかお休みはローテーションですね。国が求めている人員基準以上に人を入れていきます。

Q：素晴らしいですね。

C：それはケアハウスの方なんか特になんですけども、もちろん重度になればスタッフを多く入れなくちゃいけないんですけども、重度になって人をたくさん入れるんだったら、最初に人がいて重度にならないようにした方がお互いのメリットがあるんですよ。という形でちょっと人としては、多めに入れていきますね。

それとあと、隣が保育園だっていうところで、お母さま方、女性も働きやすい環境にはなっています。私自身も子どもを隣に預けて働いていましたので、

Q：本当？

C：そうなんです。これはいつも私自身の、何ていうのでしょうか、手前みそみたいな自慢になってしまうんですけども、子どもがいつまでも小さいわけじゃないんですね。

Q：一時ですよ。

C：一時なんです。なので、とにかく周りのスタッフに「一時だからみんな我慢しようよ」。我慢って言い方あれなんですけれども、「ちょっとみんなで協力し合うよ。子どもが大きくなったらその人がずっと働いて、ある意味、また恩返ししてくれるときが来るわけだから、みんなその間我慢しよう。我慢して支え合おうよ」ということを言っています。ですので、小さい子どもがいた人が、今は高校生になった人も働いていますし、

Q：素晴らしいことですね。

C：今現在も、子どもが隣の保育園にいて、よく休むスタッフもいるんですけども、「まあそれも一時、子どもがいつまでも小さいわけじゃないんだから」ということを言って、他のスタッフにも協力を求めています。ですので、独身のスタッフからは、「施設長は働く女性には甘い」と怒られますけれども、でもでも、いずれその人たちがちゃんと働けるときがあるわけだからね。またその人、またそういう人たちを人が入れ替わるよりも、ずっと働いてくれている方がね、みんなが楽なんだからというね、スタッフには理解を求めていますね。

一番は、それとあと、女性、子どもを持つお母さん方には、皆さん「常勤で働きたい」とか、いろいろ言うんですけども、もちろんその働く女性の給料がないとやっていけないご家庭に関しては、もちろん私は生活できるようにっていうシフトを、もちろんお手伝いはさせていただくんですけども、ご主人もいて、ちょっとこのお金があったら余裕があるという人は、まず子どもを第一に。

Q：そうですね。

C：子どもが熱を出したときは、ママの愛情が欲しいときなんだから、もう無理するんじゃないということで、そういったこともあって、皆さんにちょっと長くうちでは働いていただいてるかなと思います。

Q：大変素晴らしいお話を伺いました。私も仕事を持って子育てをしてきました。本当にポリシーが合致して、感動しました。やはり長く施設長さまをされていますよね。それは、ご自身が働くお母さんだったということですね。

C：そうですね。

Q：やっぱり経験がないと机上の空論では人を動かすことはできないし、特に学校とか介護施設、保育園は人との触れ合いが全てですよ。こちらの保育園にお預けになってということですから、トップになったときに働くお母さんの気持ちがよく分かるし、長く勤めていただくということが、総合的に考えれば、やっぱり本当に施設を運営していく中で、それしかないんですよ。

職員が感謝の気持ちをもって働ける環境をつくること、それ一番ですよ。

C：そうなんですね。

Q：ところで、この施設の歴史は、何年ぐらいですか。

C：こちらは13年ですね。

Q：保育園は何年ぐらいですか。

C：保育園が今17年です。

Q：じゃあ、保育園の方が先なんですね。

C：はい。

Q：なかなか10年以上経っている複合施設は、都内でもあまりなく、■■■■市もほとんどないですね。だからやっぱり歴史、すごいなあと思っています。何か今、課題はありますか。

C：そうですね。今はうまく回っている方だと、たぶん思いますね。

Q：ありがとうございます。施設長さまの生きてきたお姿がやっぱり全てこの施設に反映していると思います。たぶんスタッフの皆さまも働きやすく、気持ち良く働いているんだろうなということが、想像できました。

C：ありがとうございます。

Q：本日はお忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。

C：とんでもない。ありがとうございました。

Q：ありがとうございました。

(終了)

④ インタビュー逐語録 (D)

< 4 >神奈川県S市 社会福祉法人 D：デイサービスセンター管理者

Q：それでは、「幼老複合施設における世代間交流を継続させる要因」について研究をしていますので、いろいろと施設の概要等をお聞かせいただきたいと思います。どのような経緯で幼老複合施設を立ち上げたのか。そして、設立の動機なども含めてお話をいただけますと幸いです。よろしくお願いいたします。

D：はい、よろしくお願いいたします。私どもの、福祉会の創設者の理事長が、世の中において核家族化が進んでいることをとても心配しておりました。昔は家におじいちゃん、おばあちゃんがいる、そのおじいちゃん、おばあちゃんが子ども、孫を見てというのが当たり前だったのが、そういったことが今、地域でなされていないと。お年寄りも、子どもたちも、地域で過ごしていけるように、施設なんだけども、一つ屋根の下に、子どもから、そして、働いている人たちが親の世代、そして、高齢者が、おじいちゃん、おばあちゃんの世代という、三世代交流というものを自然の中で作り上げていきたいということで、法人として保育所とデイサービスというものを一緒に立ち上げたという経緯になっております。

Q：ありがとうございます。運営のためにはどのようなものを大切にされているのでしょうか。こちらの理念につながると思うのですが、お聞かせください。

C：はい。先ほどと、繰り返すにはなりますけれども、社会福祉法人として、地域貢献に何ができるか。住み慣れた場所で、住み慣れた地域、住み慣れた家で、最後まで過ごせるように、子育てから高齢者の方までをケアできる、その地域の一部になればというところで、私どもの法人がありますので、そういったところが施設理念になっております。

Q：ありがとうございます。本当におっしゃるとおりで、素晴らしいことだと思います。それでは、職員の体制等をお聞かせいただきたいと思いますのですけれども、世代間交流をしている中で、職員への、何か研修とかをされておりますでしょうか。

D：はい。保育士と介護職員で、互いの専門性の研修ということではなくて、子どもたちと高齢者が接する時間が多いということで、考え得る感染症リスクを下げるということで、互いに感染症に関しての施設内研修等を行って、なるべく施設内でのまん延を防いで、一年を通して自然の中で交流できるかたちというものを目指しております。

Q：ありがとうございます。やはりこの幼老複合施設の世代間交流は、自然交流というのが、私も大切だと思っております。この高齢者施設のスタッフと、保育園のほうのスタッフとが、連携とか、協働とか、何かされていますでしょうか。

D：はい。まずは保育士の主任とデイサービスのほうの責任者とで、年度初めには必ず、いつから自然に交流をするかを始めるか。高齢者はずっと同じ場所で卒園というものがございませんので、子どもたちは入園から卒園までというかたちで環境の変化がございますので、新しく進級した子たちが自然にまたお年寄りの場所に安全に来られるように、いつの時期にまた自然にデイサービス内に来ることを始めるかということですか、あとは、先ほど申し上げた、感染症の時期になりましたら、こういったことで気を付けていますのでということで、やりとりを必ず主任と、または園長とで話をするように機会を設けております。

Q：ありがとうございます。そして、設立から20年ぐらい、こちらの社会福祉法人もたっていると思うんですけども、ずっとやってきまして、今までいろいろ問題とか、大変なことに遭遇されたと思うんですけども、もし、そういうことがございましたら、教えていただけますでしょうか。

D：はい。まずは、繰り返しになりますけども、1点としては、やはり感染症リスクというものは、必ず防ぎようがない部分がありますので、そういったところで、どうしても交流を中止せざるを得ない時期が出てきてしまうということ。あとは、最初は手探りで始めたときには、ちょっとプログラムをつくったほうが、園児と高齢者が交流する時間というかたちで設けたほうがいいんじゃないかといって試行錯誤した時期があったんですけども、やはりやってみると、当初の予定どおり、自然に交流するかたちというものをつくらなきゃいけないので、やっぱりプログラム化というのは、誰かが望んで、道しるべを歩かせようとしている、答えになってしまうので、それは本当に自然ではないものだということに、1年経過したときにちょっと理事会とかでも話をして、やはり自然の中で交流したほうがいいということで、今、子どもたちがごみ袋を持って、ごみ当番でデイサービスのごみを集めに来たりですとか、私ども施設の中がすべてつながっておりますので、高齢者が歩行訓練というかたちで保育室のほうに歩いて行って、おじいちゃん、おばあちゃんが来たよというふうに。そこでタッチをしたり、頭をなでたりというふうなかたちで、本当に自然の中にいるというかたちで。叱られている園児を見れば、「かわいそうだね」と言う高齢者もいたり、もう片まひで頑張っているおばあちゃんに一生懸命、声を掛ける子どもがいるということで、ちょっと、だんだん自然にというかたちが出来上がってきたのではないかなというふうに感じております。

Q：ありがとうございます。私も世代間交流のお勉強をしてきているんですけども、どうしても世代間交流というと、プログラムをつくって仕掛けるという。

D：そうですね。

Q：それが本当によく言われているんですけども、考えてみれば、核家族化して、こちらの理念でもあるように、おうちにお年寄りがいなくなって、子どもとの交流がない。三世代の自然な交流を目指しているというところに、やはり一番、意義があるのかなと思っています。

D：そうですね。

Q：とても素晴らしい取り組みだと、私は今、思いました。

D：本当にそうです。子どもたちの声が高齢者にも聞こえるし、高齢者の姿が自然に目に映るといのが自然なので、自己満足のためにプログラムをつくるというのが、やっぱり、誰もがやってしまうところで、私ども法人もあったんですけど、やっぱり、答えはまた違ったところから見えてくるというかたちですね。

Q：けっこういろいろとお尋ねすると、やっぱり保育園は、入園から卒園までいろんな行事もありますよね。なので、自然なこういう日々の交流が一番、私も大事だと思います。本当に住み慣れた地域で、自然交流、おうちにいるような温かさ、それが最高だとは思いますが、何か、行事を一緒にやるということはありませんか。

D：はい。敬老会ですとか、クリスマス会のようなかたちのときには、年長の子どもたちが歌とか演奏を聴かせに来てくれるというのと、あとは、卒園式の子どもたちには、高齢

者の方々がお裁縫で巾着袋を縫って、それで上履きですとか、体操着を袋に入れられるように、だから、全部、手縫いなんですけども、なので、毎年それが30個ぐらいとか、それをつくって卒園式の日にはプレゼントをするというのが、ちょっと毎年恒例で。気が付くと、高齢者も涙するという。

Q：温かい交流ですね。

D：はい。卒園式のときには、花道をデイサービス側にもつくって、ずっと歩いてきて、花吹雪をして子どもたちを送るんですけど、本当に家族みたいにだんだん感じるんですね。1年間見ている子たちが。

Q：ああ、すてきな取り組みだと思います。高齢者もおうちからここに来て、子どもたちのために一生懸命、針を使って、そして、かたちになるって大事ですよ。

D：そうなんです。

Q：高齢者にとって何かをつくる、かたちになる。そして、それで終わっちゃうんじゃないかって、それを子どもたちが喜んでくれる。その喜びをやっぱり、お年寄りも、子どもたちも、共に共有できるって、やっぱり、本当に素晴らしいことです。

D：そうですね。高齢者には社会貢献活動、居場所づくりというかたちで、本当に世の中で、今まで大変な人生で日本を動かしてきた方々が、もう今、もしかしたらという、何もできないではなくて、できることで地域に貢献、社会に貢献。そして、あなたは大切にされているという自己存在肯定というのは高齢者にも持てますし、子どもたちも、泣いててもかわいいねって、ぐずっててもかわいいねって言ってくれる高齢者の言葉に、励まされているのかなというふうに、私は個人的には感じておりますね。

Q：そうですね。そして、子どもたちも、おうちは核家族でお年寄りを見ないけれど、毎日通ってくることによって、やっぱり高齢者の足が弱いとか、車いすの姿を見たりとか。

D：そうですね。

Q：いろんな人を見てくるから、やっぱり、人間って、強い人ばかりじゃなくって、年を取ると、体が衰えてきて。そこからきっと、優しさみたいなものを感じるしね。

D：そうですね、はい。

Q：お年寄りは生きがいに、誰かのために何かをしようという、巾着をつくることもそうだろうし、お互いが元気をもらうって、やっぱり、これが本当に幼老複合施設の素晴らしいところだと思います。私は、自然交流のお話を聞けてとてもうれしく思います。ありがとうございます。

D：いえ、とんでもないです。

Q：最後になりますけれども、ずっと幼老複合施設をやってこられまして、今、抱えている問題、みんな、どこにもいろんな課題はありますけれども、差し支えがなければ、お一つでもいいんですが、教えていただけますか。

D：私ども保育士も介護もケア労働というような枠に入るんだとは思いますが、どうしても、理念の中で職員の手というものが必要になってくる中で、どうしても専門職というものを集めるのが少し大変な時代になってきているのかなと思って、私たちがやっていることが、少しでも皆さまが知っていただいて、ここで働きたいと思っていただけるように、私たちはもう少し力を発揮しなきゃいけないのかもしれないんですけども、本当にちょっとそういったところ、人が人をケアする。ものではできないこと、機械ではできな

いことというのがございますので、ちょっとそこは、この先も課題が続くのかなという印象は持っております。

Q:本当に長く、幼老複合施設が継続しているというところがあまりないんですけども、もう 20 年ぐらい継続していること。そして、高齢者の介護施設と子どもの保育施設を同時に立ち上げたというのが、私はとても素晴らしいと思っております。本当に自然交流のお話も聞けて、自然な中で、地域の中でということで、大変うれしく思います。

あと一つ、地域との関わりのところをお聞かせいただけますか。

D:はい。社会福祉法人として地域貢献で、私どものところでは、高齢者に作業療法とか、生きがいづくりとして、先ほど言った、巾着袋を縫ったり、毛糸の帽子をつくったりとか、職員と一緒にいろんな手芸をしてるんですけども、そういったものを年に1回、保育所、デイサービスを地域の方に見ていただけるように施設内を開放しまして、その中でバザーとして手作り用品を販売させていただいて、それをその年、少し被害の多かった日本全国の地域の社会福祉協議会のほうに全額寄付をさせていただいているということが、まず1点、大きなものなのと、あとは本当に小さいことなんですけども、すぐ近くにある学区内の小学校の町探検というものだったり、学区内の中学校の職場体験というものには、毎年協力させていただいて、その子どもたちが学区探検でこの建物の中に来て、デイサービスの勉強をしに来るんですけど、そのときに卒園児が生き生きと入ってくるんですね。あとは本当に中学校になった卒園児がいたりとか、私も長く勤めているので、送迎車で走っていると、何か手を振っている子がいるなと思ったら、小学校に上がった子どもが、こちらに覚えててという感じで、本当に長くはかかりますけど、そういったことで、ちょっと社会貢献というのは、法人の理念としてはできているのかなというふうな印象です。

Q:私、本当に今のお話を伺って大変うれしく思いました。まず高齢者たちがつくった手作りが寄付されているって。それも全国の被害の遭ったところとか、それは本当になかなかできないことだと思いますし、それから、やはりここで子どもたちがお年寄りを見て、体験して、そして、大きくなって行って、本当に管理者さまのお姿を見たときに手を振ったりとか、忘れなかったり、地域に開放するって素晴らしいことで、なかなか、今、核家族だから、お年寄りもいませんけれども、このように施設に来て、体験ができるということはすごいことで、地域貢献もすごくされているなというふうにうれしく思いました。やっぱり、幼老複合施設を 10 年以上続けているというのは、しっかりとしたその理念があって、それを基にしっかりそれが時代とともに、いろいろとあるけれども、理念を貫いてやっていくということで、本当にこれは管理者さまもしっかり理事でいらっしゃるということから、理念がもう本当に体の一部になって、日々、お働きいただいていると思います。今日は本当に、幼老複合施設のよさというのかな、自然交流の姿というのを伺いできて、大変勉強になりました。お忙しい中、お時間をつくっていただきまして、ありがとうございました。

D:とんでもないです。こちらこそ、ありがとうございます。

Q:本当にずっと幼老複合施設が末永く継続していくことをお祈りしています。

D:ありがとうございます。

Q:どうもありがとうございました。

(終了)

⑤ インタビュー逐語録 (E)

< 5 > 東京都 M 市 社会福祉法人 E: 施設統括責任者 (電話によるインタビュー)

Q: これから「幼老複合施設における世代間交流を継続させる要因」について、いくつかインタビューをさせていただきたいと思います。宜しくお願い致します。

E: はい。

Q: 貴園は、高齢者施設と、保育施設を両方お持ちの幼老複合施設とお伺いしているんですけれども、どのような経緯で幼老複合施設をお立ち上げになったか、教えていただけますか。

E: はい。こちらの施設は、法人を立ち上げたのは、■■■■■というところなんです。で、■■■■■では、もともと保育事業は、今現在、全国 24 カ所、運営をしてるんですけれども、これからの高齢化社会、高齢化が進むということで、昭和 30 年にこちらの法人、高齢者施設の法人を立ち上げています。

Q: そうですね。

E: ええ、ですから、当時、財団法人なので、こういった社会福祉施設は独自には運営できないということで、独自に社会福祉法人をつくらなければいけないということで、こちらに、■■■■■の地につくったところなんです。

Q: ああ、なるほど。

E: もともとは高齢者施設ということで始めましたけれども、平成 20 年、開設した■■■■■■■■■■というところなんですけれども、もともとが昭和 36 年からある軽費老人ホームというところなんです。それが同じ敷地内にありまして、もともとは有料老人ホームの先駆けなんですけれども、社会法が執行されてから、軽費老人ホームの A 型というものになっているんですけれども、そちらの施設が築 47 年を経過して老朽化したということで、建て替えの話が出まして、その準備期間のうちにこちらの■■■■■の地域もかなり若い世代が増えて、保育事情というか、保育園が非常に少なく、待機児童が多くなってという課題もあって、この高齢者施設を建て替えるに関して、■■■■■市との協議をしている中で、できれば保育園と一緒にやってくれないかということだったんですね。もともと、その■■■■■が保育事業も昔からやっているんですけれども、何十年も前からやっているということもあって、そういったことも■■■■■市も知ってて、そういったノウハウもあるということで、もし改築、建て替えがあるのであれば、一緒に保育園をできないかという話があったので、計画のところで、そもそも複合施設というか、幼老の施設をつくるという計画から始まっているんですね。

Q: そうですね。じゃあ、■■■■■市からの要請もあったということですね、きっかけは。

E: そうですね。もともと■■■■■市の高齢者事業というか、そっちのほうになっていたのが、われわれ■■■■■のほうになるんですね。

Q: ああ、なるほど。

E: 非常に密接な関係があって、その中でやっぱり、■■■■■市の事情もあり、こちらの事情もあるということで、こちらのほうで、じゃあ、そういった複合施設と、やはりこの養老施設というか、もともとの開設するところのものがケアハウスというもので、それは在宅

というか、介護保険でも、これから入所施設ではなくて、施設の在宅化というか、よりそういうところを進めていくというような国の方針もあつたりとかしますので、ケアハウスをつくるうえで地域にどう踏み入れていくか。地域との交流をどう進めていくかということがもともとのコンセプトであつて、その中で保育園もそうですし、例えば、地域の小学校とか、学校、いろんなどころの世代との交流ですね。そういったところ、もともとの地域自体が、あまり普通の住宅街ではなかつたんですね。なので、工場地帯で住民が少なかったのが、したがって、この法人の運営自体は、法人内でというか、内部向けの事業がけっこう多かった状況なんですけども、これからの将来的な今後の福祉の関係から見ると、なるべく地域との交流を進めていくというところで、そういったところが念頭にあつての計画ということになります。

Q：ありがとうございます。今まで幼老複合施設といいますと、本当に合築か併設で、高齢者とそこにいる子どもだけの交流の始まりが多いんですね。その中の世代間交流というかたちなんですけれども、平成 25 年ぐらいになって、厚労省のほうも地域共生社会ということを出して、高齢者も子どもも、それから障害者もみんな、地域ぐるみでやっついこうというのを強く方針を出してきてましたけど、やはり、■■■■市は、いち早くその高齢者事業をしている貴園に目を付けて、早くから地域ぐるみの交流を全国に先駆けて、このような幼老複合施設を立ち上げようという考えがあつたことが、今のお話からよくわかりました。ありがとうございます。

E：保育園に通ってくる子どもたちだけじゃなくて、その親の世代、若い人たちの老人福祉の対する意識というか、認識も変わってくるし。

Q：そうですね。

E：園児が卒園をして、小学校に入ってというかたちで、将来的な。長い目で見れば、人材確保にもつながるし。

Q：本当にそうですね。もしかしたら、本当にそこで保育園にいた子どもが、お年寄りを身近に見ていて、大きくなって、福祉の世界に入ろうとかいって、いつかきっと、お仕事をそこでされているという姿もあるかもしれませんものね。

E：そうですね。実際に目に見えるかたちで、1歳児で入ってきて、最初はやっぱり、先生の陰に隠れて、高齢者施設に来て、ちょっとあまり見慣れないというか、見られないお年寄りというか、そういうところで、ちょっとびくびくしてたところが、卒園するときには、すごくあいさつもちゃんと、自分から進んで高齢者と関わってくるというところが、やっぱり目に見えてわかるようになりますね。

Q：そうですね。私が求めているとても自然なかたちで、素晴らしいことだと思います。社会福祉法人として、運営のために何を大切にされているか。これは、施設の理念につながると思いますけれども、高齢者の施設の立場から、例えば、どんなことを大切にされていますか。

E：そうですね。この複合施設のほうは、ケアハウスというところなんですけども、比較的、今、要介護1から、要介護5の方が入られてて、比較的、自立されている方もいらっしゃるという中で、いかに高齢者施設に入所するということは、家庭の中でうまくいかなかつたりとかもあるし、精神的、肉体的なところで、具体的などころでの障害があつて、例えば、暮らせないとか、一人暮らしができないとか、そういったいろんな事情があつて、

そもそも在宅では、本当は在宅で暮らし続けたいんだけど、なかなかそれがかなわない事情があるということで、こういった入所施設を選ばれることですよ。だから、入られてからも、昔の老人ホームに入ったということではなくて、入られてからも地域とのつながりがあったりとか。あと、うちで一番モットーとしているのは、笑顔ということなんです。笑顔になれる時間を大切にするとか、そういったところで、やっぱり、職員のほうも笑顔で、優しい気持ちで接するというので、高齢者の方も入って、そちらでよかったなという、ちょっと安心して生活していただけるというふうにしていこうということが、もともとの理念の中でうたわれていることなんです。

Q：はい。職員も、それから高齢者さまも笑顔ということで。やっぱり高齢者にとって、おうちから離れて生活するわけですから、安心が一番ですよ。

E：ええ。あとは不安から解放される。そこに園児の笑顔というのも、声とか、しぐさとか、そういった園内に園児が遊んでいたりとかが、日常的に子どもを見ることができて、本当に普段、いかつい顔をしてというか、あまり笑顔を見せないような男性の方でも、本当に園児が来ると、すごい笑顔。なかなか職員であつても見られないような、出せないような笑顔になるというのが。

Q：それが本当に私たちの願いというか。

E：そうですね。そういう方を見ることで、職員もやりがいがある。

Q：そうですね。やっぱり、やりがいがあるということは、全部、高齢者に寄り添ってお仕事できるということにつながりますものね。

E：だから、寄り添うということが大事だと思うんですよ。

Q：はい、そうですね。今、園内の中で、お年寄りが子どもたちの笑顔や自然に遊んでる姿を見ることができるというのは、もうそれで自然交流と思うんですけども、そうではなくて、高齢者施設の高齢者と子どもたちが、何か交わるチャンスというのを、例えば、行事の中であるとか、事例がありましたら、具体的に教えていただけますか。

E：そうですね、今はケアハウスのほうと保育園のほうとで、地域交流委員会というのがあって、そちらで職員同士の意見交換とか、情報交換をしながら、年間の交流の計画をつくってしまっていて、いろんな運動会だとか、みこしを担いできてくれたりとか、クリスマスとか、あとは卒園のときに、小学校で使う雑巾というか、布巾ですよ。それを高齢者の方が縫って、卒園のときにお渡しをしますとか。

Q：うわあ、すてきですね。

E：クリスマスのときにプレゼントをつくって、プレゼントをしたりとか、そういったところで、あとは、敬老の祝賀会というのがあるんですけど、敬老のときには、園児が日頃練習している演技とかで、そういったことを敬老祝賀会の2部で踊ってもらって、歌ったりとかしてくれることを見るというかですね。

Q：ああ、そうですね。すごいですね。高齢者が手作りで雑巾とかをつくって、それを卒園のときに差し上げるって、本当に一針一針ごとに気持ちがこもって。

E：そうですね。それを使っているうちもね、思い出してくれるとかね。

Q：そうだと思います。本当に、働くお母さんが多くなってくると、なかなか手作りの雑巾なんて、できないじゃないですか。

E：そうですね。

Q：確実に小学校でお雑巾は使うわけですから、これをここのケアハウスのお年寄りたちが作ってくださったと思えば、子どもたち、すごくうれしいし、張り切って小学校に行けることができますよね。

E：そうですね。

Q：いい交流のお話を聞かせていただきました。そして、やっぱり、高齢者と子どもたちがお互いに理解していくためには、介護の専門家の方たちも、子どものことをちょっと知らなければいけないし、保育の方たちも、高齢者のこともわからなければいけないんですけども、この交流のために何か研修みたいなことをやったりはしていますか。

E：いや、特にはやってはいないんですけども、身をもってその意義というか、そういったことを交流しながら、そういうことを職員が理解していくということだから。

Q：そうですね。それは本当にそうだと思います。頭で机上のお勉強で、こういうもんだというんじゃなくて、触れ合いながら、ああ、こういうとき、子どもはこういう反応を取ったし、お年寄りもこう反応を取って、そこで学んでいくということですよ、実践で。

E：そうですね。まさに結果がそういうふうになるんだと。

Q：そうですね。おっしゃるとおりだと思います。先程、高齢者のケアハウスの方と、子どもたちの保育所の方たちが、連携や協働がなされていますかということ伺ったんですが、地域交流委員会というのをつくって、そこで年間の計画をつくって、協働されているということでしょうか。

E：そうですね、はい。

Q：わかりました。それから、今までこの幼老複合施設ができて、継続していく中で、何かお困りごととかがありましたら、その事例を教えてください。

E：そうですね、一番困るのは感染症なんです。お互いに園児のほうも感染症はありますし、高齢者のほうもそういうことがあるので、お互いに交流の計画を立てていても、園児に出たとか、高齢者に出たとかというと、それが中止になったりとかすることもありますので、ちょっとこの、うちは高齢者のほうも11月から3月は、感染症の強化対策月間みたいなかたちになっていて、お互いちょっとこの期間はあまり交流はできないところがあったんですね。あと、日常的な介護が、交流ができてないというか、一緒に遊んだりとか、そういうことでは、本当はそういうことができるのもっといいのかなと思うんですけども。

Q：そうですね。

E：それができないところが、ちょっと課題かなとは思ってます。

Q：でも、姿を園庭とかで見ることはできるんですよ。

E：ああ、そうですね。それはもうできるので。

Q：遠くからでもお互いにいろいろ見るということで、そこで立派な自然交流ですよ。あえて何かを仕掛けるということをしなくても、自然に何かを見て、そこから笑顔がというのがやっぱりいいかなというふうに思いますね。

E：そうですね。今、かなり敷地が広いんですね。園庭もあるんですけども、そのほかに芝生広場とか、築山とかがあったり。

Q：すごいですね。

E：もう普段から、外で遊んでるんですね。囲むように高齢者施設があるので、その声が聞こえたりとか。

Q：いいですね。

E：遊んでいる姿が見られたりとか、そういったところがいいことではあると思うんですけど。

Q：そうですね。それが何よりだと思います。ありがとうございます。地域との関わりについてですが、先程、この施設を作った経緯を伺った際に、初めから■■■■市のほうからも、地域との関わりということで働きかけがあったと伺いましたけれども、どんな地域との関わりがあるか、事例を教えてくださいませんか。

E：そうですね、一応、法人の中には包括支援センターというのがあって、地域に根差したところの法人としての事業としてはあるんですね。そのほかに、隣に■■■■大学がありまして、大学生、大学の先生が研修とか、みとりとか、そういったところの講義というか、研修に、地域向けの、地域の方を呼んだ研修をしたりとか、それをこちらの施設でやったりとか、大学のほうでやったりとか。それとか、学生さんも、もちろんそうですし。

Q：ということは、施設を地域に開放して、お貸して、大学の先生に来ていただいて、こちらで大学の先生が講義をするのですね。

E：そうですね。

Q：あと、1年に1回ここで大きなイベントがあると、伺ったのですが、教えてくださいませんか。

E：はい。もともと園遊会といって、中に入っている方の利用者の方と、そのご家族向けに、なかなか家族とも交流ができなかったりとかするので、そういう機会に来ていただくということで、ずっと法人の中でやっていたんですけども、建て替える時期に■■■■市との話の中でも、保育園の事業をしたりとか、あと、これからも入所施設の地域との関わりということを検討する中で、ちょっと中身を変えて、「■■■■まつり」ということで、もう利用者の方ではなくて、地域に向けてということで、地域の方に来ていただくイベントをやっているのですね。その中で、スローガンというか、地域の力から施設の力という2つのもので、施設の力もそういったところで期待に対していくということと、理解をしていただくとか、あと、地域の力、地域の方の、例えば、イベントに参加してもらおうとか、そういったことをしていくということですね。

Q：なるほど。

E：その中で、セミナーみたいなのをやって、こちらの施設の紹介をしたりとか、地域の中で困っていることとか、必要なことを包括支援センターが中心にやったりとか、そういったところで、人数的に毎年、毎年、だんだん増えていって、今は700～800人ぐらいの。

Q：すごいですね。1日でですよ。

E：1日ですね、ええ。

Q：すごいですね。素晴らしい。

E：だんだん浸透されてきたというかですね。先ほど言ったように、ちょっと地域的なところがあって、あまり町中にあるわけじゃないので、あまりこのことをなかなか身近に感じてもらえないところがあるのかなというのがあるって、そのイベントを通じて、案内を新聞広告で。

Q：ああ、そうですか。

E：ええ、配布するんですね。この地域の方なんですけど。そういうこともあって、少しずつ認識されてきて、だんだん人が増えてきているかなというところです。

Q：やっぱり、これも継続は力なりで、だんだんアピールをしていった結果ですね。たった1日で参加者が800人ぐらいて、すごいイベントだと思います。

E：そうですね、はい。

Q：でも、それを行うためには、本当に法人が一体化して、とてもきめ細やかな準備とか、大変だと思いますけれども、皆さん、心一つになってやっていらっしゃるということは素晴らしいことだと思います。

E：準備は月に1回ぐらい、もう5カ月前ぐらいから。

Q：すごいですね。そうすると、きっと地域にいらっしゃるお年寄りという方たちも、なんとなく施設には行きたくないなとか思いながらも、ちょっと門をくぐったりすると、やっぱり、施設ということを感じて地域のお年寄りもいらっしゃると思います。

E：そうですね、はい。そういう意味で、何かあったときの相談。

Q：みんな、おうちで最期はと、思う方は多いとは思いますが、やはり認知症とかになると、おうちの方だけではできない。私は自分の経験から。プロの方にお任せするということがとても大切だと思っているんですが。だから、きっと地域のお年寄りの方たちが1年に1回、開放されたこんな広い地域の施設というのがあって、中でいろんなことがあるということを知ることができて、とても地域向けに素晴らしいと思います。

E：■■■■のほうからも話があったと思うんですけど、ボランティアの方たちも、かなり来てもらって、そういうイベントとかもあって、地域の方に関わってもらおうということが、非常に施設運営の中でもボランティアの力というのが非常に大きいですね。

Q：そうですね。本当にボランティアの力って大切で、それでいろいろとみんな感じることで、その人の本当に人生観まで変わるかもしれないぐらい。だから、ボランティアの方がもう延べ数、先ほど聞いてびっくりしてしまったんですけど、本当に3,000人ぐらいの方たちが、延べ数で今までお手伝いされたということで。社会福祉法人がしっかりしてるなと思ったのは、そういうボランティアさんを受け入れるというのは、法人としての組織がしっかりしていないと、ただ来てもらって、何をするかどうか、けっこう大変じゃないですか。受け入れ側も。組織としてすごく貴園は素晴らしいと感じています。

E：ありがとうございます。

Q：今日は大変、本当に素晴らしい組織としてのお話を伺ったんですけど、もし、何か今、抱えている課題というものがありましたら、教えていただけますか。

E：そうですね、やはり人手不足とか、人材確保というのはなかなか難しくなってきましたよね。

Q：ええ、そうですね。

E：ええ。今のところは、どちらかという、まだうちの法人としては、人材的にはそろってるかなと思いますね。これから、今後、将来的にどうしていくかというところで、法人のアピールというか、いいところをどういうふうに出していくかとか、目標をどうつくっていくかとか、そういったことが課題になってくるのかなと思います。

Q：今後の課題について、ありがとうございました。本日、お電話でお話を伺って、法人としての組織力があって展開されるということは、幼老複合施設を継続していく要因の一

つであるのではと思いました。お忙しい中、お時間を作って頂き、貴重なお話を本当にありがとうございました。

E：いえいえ。ぜひ遊びに来てください。

Q：はい。10月の「XXXXXXXXXXまつり」にはお伺いして、お会いできたらと思います。ありがとうございました。

E：はい、失礼します。

Q：どうもありがとうございました。

(終了)